

現代日本語におけるコピュラ文の階層構造

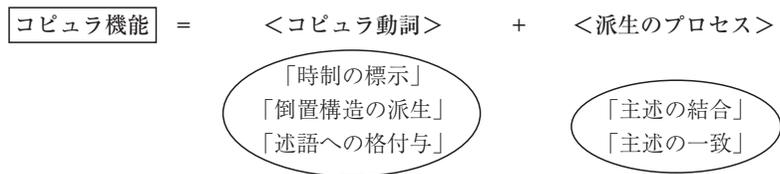
-コピュラ動詞とモダリティ形式-

広島大学

上野 貴史

1. はじめに

拙稿(2023)では、英語、ロマンス語、ロシア語、アラビア語などのコピュラ文の分析を通して、コピュラ文に見られる統語的役割（コピュラ機能）にコピュラ動詞自体が持つ働きと、コピュラ文が派生するプロセスにおいて達成されるものがあることを指摘した。そして、コピュラ動詞が担う統語的役割である「時制の標示」、「倒置構造の派生」、「述語への格付与」と、コピュラ文の派生のプロセスに関係する「主述の結合」・「主述の一致」の総体がコピュラ機能であることを<図1>のように示した。



<図1：コピュラ機能の総体>

このような「時制の標示」、「倒置構造の派生」、「述語への格付与」という機能を担うコピュラ動詞は、英語の *be* やフランス語の *être* のように、形式として明示的に標示される言語がある一方で、ロシア語やアラビア語のように、時制によって明示的な形式が現れたり現れなかったりする言語もある（コピュラ脱落(copula dropping)）。

(1) *Rus.* a. Raskol'nikov ϕ^1 ubijca.Raskolnikov_{V.Nom} murderer_{Nom}

「ラスコルニコフは殺人者だ」

(Geist 2008: 97)

b. Raskol'nikov byl ubijcej.

Raskolnikov_{V.Nom} be_{3.Sg.Past} murderer_{Instr}

「ラスコルニコフは殺人者だった」

¹⁾ 音形のない現在時制コピュラ動詞を「 ϕ 」として記述する。

(2) Arab. a. ϕ Zayd-un l-malik-u.

Zayd_{Nom} the-king_{Nom}
「ザイドは王様だ」

(Alharbi 2017: 75、一部改変)

b. *kaan-a* Zayd-un l-malik-a.

be_{3.Sg.Past} Zayd_{Nom} the-king_{Acc}
「ザイドは王様だった」

(Alharbi 2020: 22、一部改変)

ロシア語やアラビア語のコピュラ文においては、現在時制で明示的なコピュラ動詞が出現することはないが ((1a)・(2a))、過去時制ではロシア語で *byt'* の三人称単数過去時制形態 *byl* ((1b))、アラビア語で *KWN*²⁾ の三人称単数過去時制形態 *kaana* ((2b)) というコピュラ動詞が顕在的に出現する。参考までに、英語・ロマンス語・ロシア語・アラビア語のコピュラ動詞の形式と時制を一覧にしたものが<表1>である。

<表1：コピュラ動詞の形式と標示される時制 (拙稿 2023: 72)>

		英語	ロマンス語	ロシア語	アラビア語
定形節	現在時制	<i>be</i>	<i>ESSE</i> ³⁾	ϕ	ϕ
	過去時制			<i>byt'</i>	<i>KWN</i>
非定形節			—	ϕ ⁴⁾	ϕ

このようなロシア語やアラビア語における時制によるコピュラ脱落は、日本語においても見られるという指摘があり、西垣内・石居(2003)は、日本語における「ダ」・「デス」のパラダイムを(3)のように提示している。

過去時制	非過去時制	時制なし
ダッタ	ϕ	ダ
デシタ	—	デス

(西垣内・石居 2003: 177、一部改変)

(3)は、「ダ」・「デス」自体が時制を有するコピュラ動詞ではなく、コピュラ動詞は非過去時制で「 ϕ 」、過去時制で「ダッタ」・「デシタ」であるということを示している⁵⁾。このように日本語においても、ロシア語やアラビア語と同様のコピュラ脱落が「ダ」系にあり、< ϕ /ダッタ>という時制の対立が見られるとされるのであるが、日本語においては、このような

²⁾ *kaana* の活用していない形態を *KWN* として記す。

³⁾ ロマンス語における音形のあるコピュラ動詞を *ESSE* として示す (*Fr.*: *être*, *It.*: *essere*, *Sp.*: *ser* など)。

⁴⁾ ロシア語・アラビア語で非定形節に出現する音形のないコピュラ動詞を「 ϕ 」として記述している。

⁵⁾ 西垣内・石居(2003)では、疑問マーカー「カ」の出現しない疑問文には I-to-C 移動が行われているとし、(i) のような文が容認されないのは、コピュラ動詞「 ϕ 」が C⁰にある「ダ」を飛び越えて移動できないためであると主張している。

i) *その人は [_{CP} [_{XP} [_{IP} 太郎 ϕ]だ]?]?

(西垣内・石居 2003: 178、一部改変)

コピュラ動詞の時制の対立と、「ダ」に含まれるモダリティ⁶⁾ (modality)の意味機能が統語構造上複雑に現れる。このような意味において、日本語のコピュラ文の構造は、ロシア語やアラビア語と大きく異なる様相を呈する⁷⁾。

以上のようなことから、本稿では、① コピュラ動詞の体系、② モダリティ領域の構成、③ 疑似モダリティ形式の統語構造、④ コピュラ動詞とモダリティ形式の統語的出現位置、などを分析することにより、日本語におけるコピュラ文の階層構造を明確にしていく。通言語学的なコピュラ機能という観点から上記①～④を考察することにより、日本語コピュラ文の統語構造を確立していくことが本稿の目的となる。このために、まず、第2節で、拙稿(2023)で設定した通言語学的なコピュラ機能を日本語のコピュラ構造に適用する場合の問題点を概観する。続いて、第3節では、国語学・日本語学における文階層構造やモダリティに関する先行研究において、「ダ」・「デス」がどの様に扱われているかについての検討を行う。このことにより、国語学・日本語学においてコピュラ動詞とモダリティがどの様に「ダ」・「デス」と関連するかを検証してみたい。最後に、第4節では、① モダリティ形式「ダ」の統語位置、② 従属節における「ダ」と「デス」、③ Mod_{P2}に位置する疑似モダリティ形式、の分析から日本語コピュラ文の階層構造を構築していく。

2. 通言語学的なコピュラ機能から見る日本語コピュラ文

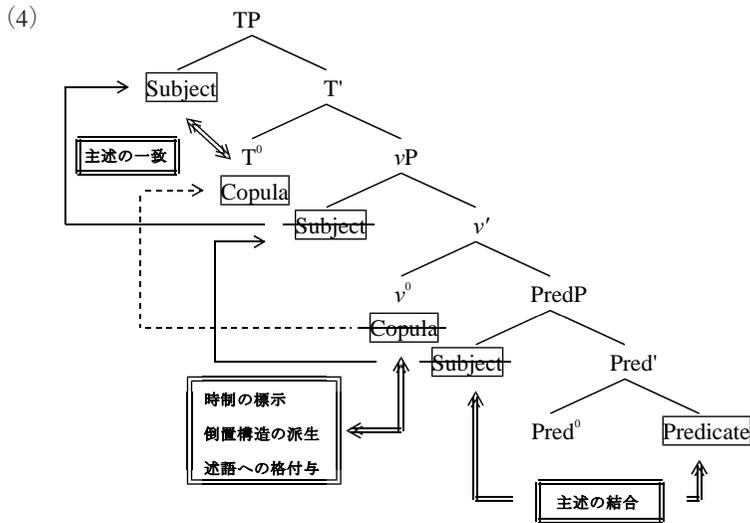
コピュラ文が派生する統語構造について、拙稿(2023)では、コピュラ動詞が位置するvPの下にPredPを配置した<TP - vP - PredP>という基底構造を設定している。この基底構造に<図1>で示したコピュラ機能を加えて樹形図で示したものが(4)である。

コピュラ機能における「主述の結合」は、コピュラ動詞が併合されるvPではなく、PredPにおける主語(Subject)と述語(Predicate)の「結合」という派生のプロセスにおいて実現する。また、「主述の一致」は、TP指定部まで繰り上がる主語DPとTP主要部に編入されるコピュラ動詞(Copula)の「指定部-主要部」関係によって生じる⁸⁾。また、コピュラ動詞は、vPの主要部であるv⁰に位置し、「時制の標示」、「倒置構造の派生」、「述語への格付与」という機能を果たす。

⁶⁾ 本稿では、「モダリティ」という用語を「話し手が命題に対して持つ心的態度を表す文法的表現」として使用する。国語学・日本語学においては、このモダリティの中で、特に、動詞類の屈折体系に関わる文法範疇を「ムード」(mood)と呼ぶが、本稿では、生成文法的立場からこれを「モーダル」(modal)と呼ぶことにする。

⁷⁾ 「デス」系に関しても、(3)を見る限り、非過去時制コピュラ動詞が存在しないことになっているが、過去時制「デシタ」と対立する非過去時制が存在しないということは考えにくいことである。

⁸⁾ 本稿では、主語への格付与も「指定部-主要部」関係によって行われると考えている。



日本語のコピュラ文の統語構造を考える場合、(4)で示した統語構造と異なる点に配慮する必要がある。その一つ目は、(4)で示した統語構造は、左側主要部言語の構造であることから、これを右側主要部の構造に変更する必要があるということである。

二点目は、日本語のコピュラ動詞の体系と「ダ」・「デス」との関係についてである。第1節でも述べたように、日本語の「ダ」・「デス」は、(5)のような英語のコピュラ文に出現する *be(is)* の訳として出現する「ダ」・「デス」と意味・統語機能において大きく異なる。

- (5) a. Mr. Tanaka is a captain.
 b. 大谷さんはキャプテン da/desu

これは、日本語の「ダ」・「デス」に、英語のコピュラ動詞 *be* にはないモダリティの意味が含まれることと大きく関係している。例えば、『日本語文法大辞典』には、「ダ」・「デス」の意味として(6)のような記述が見られる⁹⁾。

- (6) a. 「ダ」: 間違いないことと判断した意を表す。
 b. 「デス」: そうと判断したということを丁寧ないう語。

この『日本語文法大辞典』の説明からは、「ダ」には「判断」というモダリティが含まれおり、その丁寧形が「デス」であるということが窺える。このことから、日本語コピュラ文の文末

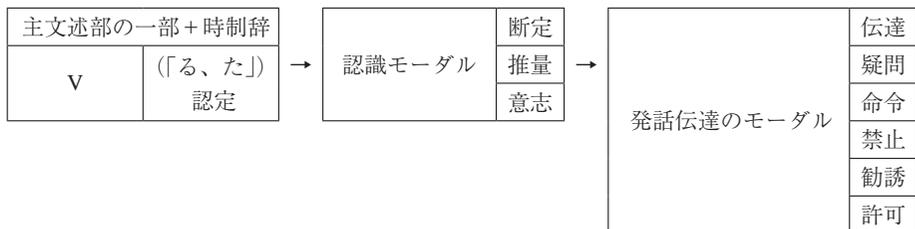
⁹⁾ 本稿では、「デアル」については扱わないが、『日本語文法大辞典』には「間違いないことと判断した意を表す」との記載があることを参考までに記しておく。

に現れる「ダ」・「デス」は、第一義的には「判断」という意味を持つモダリティ形式であると考えられる。しかしその一方で、「ダ」・「デス」には、表層的に、<ダ/ダッタ>・<デス/デシタ>といった時制の対立が存在しているようにも見える。このように、時制とモダリティという機能がコンピュータ文中の「ダ」・「デス」の内外に重なり合って現れるのが日本語コンピュータ文の特徴であるため、この「ダ」・「デス」に含まれる時制とモダリティがどのような関係にあるのかを明確に示すことが日本語コンピュータ文の統語構造を考える上で重要なものになると考える。

三点目は、通言語学的な統語構造には見られない日本語のモダリティが階層構造上どの様に配置されるかという問題である。生成文法研究の枠内において、日本語のモダリティを意識して文の階層構造を示したものに井上(1976)がある(7)。

(7) 太郎が序文を翻訳し てい る だろう ね
 文核 | 相 | 時制辞 | 認知的モダリティ | 発話・伝達のモダリティ
 (井上 1976: 5、一部改変)

(7)では、[文核—相—時制辞]という命題(proposition)の後に、命題的なく認知的モダリティ>と発話伝達のなく発話・伝達のモダリティ>という二つのモダリティ形式が続いている。さらに、井上(2007b)では、(7)を修正した<図2>のような「文成立とモダリティの構造」を提示している。



<図2：文成立とモダリティの構造 (井上 2007b: 242)>

井上は、モダリティに「発話内容に対する話し手の認識を表す認識モダリティと発話の伝達に関する話し手の態度を表す発話伝達のモダリティ」(井上 2006: 40)があり、「文が成立するためには、発話伝達のモダリティの中のどれかを1つ選ばなければならない」(井上 2007b: 243)と指摘している。井上(2007b)では、これらのモダリティ句(ModP)をModP₂(認識モダリティ)、ModP₁(発話伝達のモダリティ)と呼んでいる。これらのモダリティ句を拙稿(2023)で設定したコンピュータ文の基底構造に当てはめてみると(8)のようになる。

(8) PredP - vP - TP - ModP₂ - ModP₁

- ① ② ③ ④ ⑤

(8)における①の PredP は「主述の結合」が行われる位置、②の vP はコピュラ動詞が出現する位置、③の TP は時制が現れる位置である。この <PredP - vP - TP> は通言語学的なコピュラ文の統語構造と同じであるが、日本語では、この上にさらに、④の ModP₂と⑤の ModP₁という2つのモーダル句が出現する必要がある。

四点目は、(8)で示した統語構造は主節のものであり、従属節では異なる統語構造になるという点である。

(9) a. 大谷さんはキャプテン *da yo*

b. [大谷さんがキャプテン *da* (**yo*)] と思っている

主節の文末に終助詞「ヨ」が出現する(9a)のような文は容認されるが、(9b)のように、補文標識「ト」の前にある従属節末に終助詞「ヨ」が現れると非文法的となる。このことは、主節と従属節とで CP レイヤーが異なるという意味する。このことに加えて、主節に出現する「ダ」と従属節に現れる「ダ」が異なるモダリティを示すという問題もある。これらのことについては、4.2. 節で詳細に考察を行うことにする。

以上、本節では、通言語学的なコピュラ文の統語構造から日本語のコピュラ文を考える場合、① 日本語が右側主要部言語であること、② コピュラ動詞の体系と「ダ」・「デス」との関係、③ TP の上に二種類のモーダル句があること、④ 主節と従属節とで統語構造が異なること、を考慮に入れる必要があることを指摘した。次節では、②の「コピュラ動詞の体系と「ダ」・「デス」との関係」と③の「二種類のモーダル句」に関して、国語学・日本語学における文階層構造やモダリティの先行研究で、「ダ」・「デス」とコピュラ動詞・モーダル句がどのように取り上げられているかを概観してみる。このことにより、「ダ」・「デス」がコピュラ動詞やモダリティとどのような関係にあるのかを検証してみる。

3. 日本語における文の階層構造

文は、「客観的に把握される事柄を表す要素と、表現者の主観的な判断・表現態度を表す要素の二大要素で構成される」(益岡 1991: 33)とあるように、「客観的に把握される事柄を表す要素」である命題と、「表現者の主観的な判断・表現態度を表す要素」であるモダリティという階層から構成される。一般的な述語文における命題には、<命題核>(vP)と呼ばれる[語幹-ヴォイス(VoiceP)]と<個別事態(specific event)>と呼ばれる[アスペクト(AspP)]

一否定(NegP)一時制(TP)] という内部構造があり、この命題の後に二種類のモーダル句が後続する。このように、日本語の述語文は、(10)のような階層構造を持つものとして一般的に示すことができる。

(10) [命題 [命題核 vP - VoiceP]][個別事態 AspP - NegP - TP]][モダリティ ModP₂ - ModP₁]

コピュラ文の命題核は、述語文とは異なり、第2節で述べたように、[PredP - vP]という内部構造となる。また、コピュラ文では、態を示す VoiceP やアスペクトを表す AspP は出現しない。このことから、コピュラ文の階層構造は、この段階で(11)のように示すことができる。

(11) <コピュラ文の階層構造>

[命題 [命題核 PredP - vP]][個別事態 NegP - TP]][モダリティ ModP₂ - ModP₁]

本節では、国語学・日本語学においてコピュラ動詞やモダリティ形式がこの<コピュラ文の階層構造>にどの様に分布するかを概観するのであるが、その前にまず、南(1993)、寺村(1984)、仁田(1999)、益岡(2007)の文の階層構造で用いられている用語を<表2>としてまとめてみる。

<表2：各先行研究で文の階層構造に使用されている用語>

	<命題核>	<個別事態>	<モダリティ>	
	[PredP - vP]	[NegP - TP]	[ModP ₂]	[ModP ₁]
南 (1993)	描叙段階	判断段階	提出段階	表出段階
寺村 (1984)	コト	ムード1	ムード2	ムード3
仁田 (1999)	言表事態		言表事態めあてのモダリティ	発話・伝達のモダリティ
益岡 (2007)	一般事態	個別事態	判断のモダリティ	発話のモダリティ

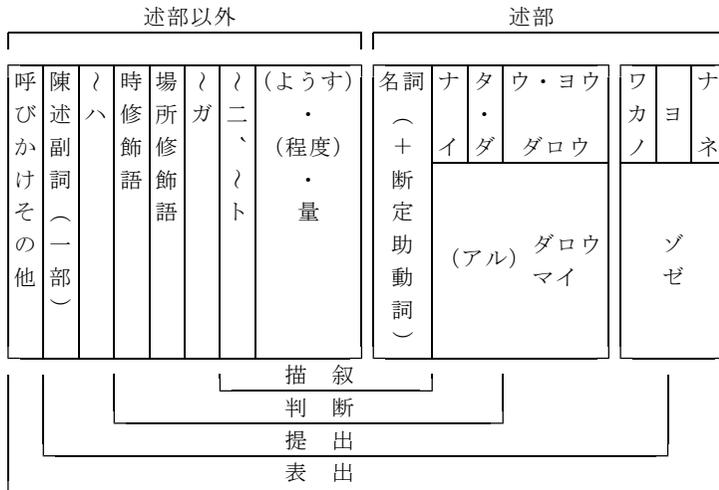
それぞれの先行研究においては、文の階層構造において異なる用語が用いられているが、(11)で示したコピュラ文の階層構造に該当する要素がおおよそ示されている。以下では、「ダ」と「デス」に分けて、それぞれの先行研究がこれらをどの様に文の階層構造の中で扱っているかを概観してみる。

3.1. 文の階層構造における「ダ」

国語学・日本語の文階層研究やモダリティ研究における「ダ」に関する言及は、「ダ」が出現する位置から、① [vP - NegP - TP]、② [[vP - NegP - TP] - [ModP₂]]、③ [ModP₂]、という三種類に分類できると思われる。次に、それぞれの立場ごとに考察を加えていくことにする。

3.1.1 「ダ」が [vP - NegP - TP] にあるとする立場

「ダ」が [vP - NegP - TP] にあるとする立場としては、南(1974, 1993)を挙げることができる。南(1993)では、名詞述語文の階層構造として<図3>のようなものが示されている。

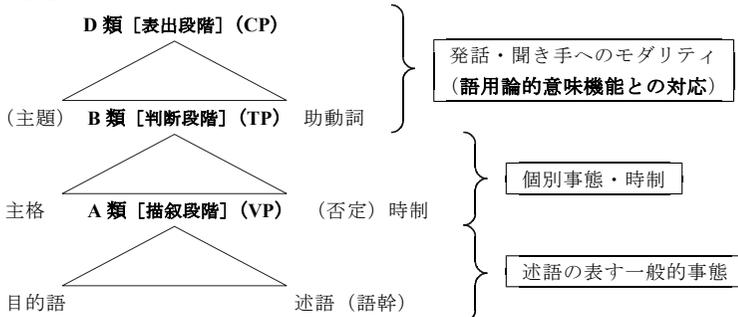


<図3：名詞述語文の階層（南 1993: 58）>

南(1993)では、述部と述部以外のそれぞれに<描叙段階>、<判断段階>、<提出段階>、<表出段階>という4つの段階¹⁰⁾があるということが示されている¹¹⁾。この中で、「ダ」は「断

¹⁰⁾ 田窪(1987)では、南(1993)の4つの段階を下記のように単純化して記述されている。
 A [描叙段階] (動詞句 動作) = 様態・頻度の副詞 + 補語 + 述語
 B [判断段階] (節 事態) = 制限的修飾句 + 主格 + A + (否定) + 時制
 C [提出段階] (主節 判断) = 非制限修飾句 + 主題 + B + モーダル
 D [表出段階] (発話 伝達) = 呼掛け + C + 終助詞 (田窪 1987: 38)

¹¹⁾ 長谷川(2010)では、統語構造と意味論の関係を南(1993)などからの文の階層構造と関連付けて (i) のように構造化して示している。



(長谷川 2010: 10、一部改変)

(i) の「判断段階」より下にある [VP - TP] が本稿で言う命題ということになる。一方、この「判断段階」より上にある語用論的意味機能に対応する「表出段階」がモダリティに対応する。

定助動詞」として述部にある「名詞」に選択的に接続するものとして示されている¹²⁾。この選択的な断定助動詞は、命題部分である判断段階の内部にあることから、南(1993)は統語的に「ダ」をモダリティではなく命題部分にあるコピュラ動詞として捉えているようである。また、選択的に断定助動詞が出現するとしていることは、音形として明示的に現れないコピュラ動詞「 ϕ 」があることが示唆される。さらに、南(1993)では、直接的に「ダッタ」について触れられているわけではないが、この「ダッタ」が断定助動詞「ダ」に時制「タ」を後続させているものであると考えると、断定助動詞は、時制 TP を含む [vP - NegP - TP] に位置するものと捉えることができる。このことを日本語コピュラ文の階層構造の中に示してみたものが(12)である。

$$(12) \left[\text{命題} \left[\text{命題核 PredP} - \left\{ \begin{array}{l} \text{vP} \left[\text{個別事態 NegP} - \text{TP} \right] \\ \text{da/datta/} \phi \end{array} \right\} \right] \right] - \left[\text{モダリティ ModP}_2 - \text{ModP}_1 \right]$$

このような「ダ」が [vP - NegP - TP] に位置するとする立場は、「ダ」がコピュラ動詞であるとともに、同じ非過去時制コピュラ動詞である「 ϕ 」との交替が可能であるということを示すことになる。しかしながら、このような交替が適切ではないということは、(13)のような疑問文における容認度の違いから容易に理解できる。

- (13) a. 大谷さんはキャプテン ϕ ?
 b. *大谷さんはキャプテン *da* ?

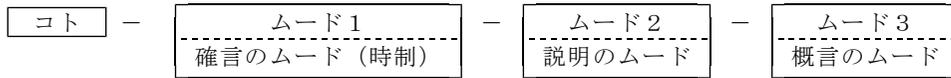
文法的である(13a)はコピュラ動詞「 ϕ 」があると仮定して疑問文にしたものであるが、これを(13b)のようにコピュラ動詞「ダ」と交替すると容認されない。このことから、非過去時制におけるコピュラ動詞〈ダー ϕ 〉の交替は否定される。また、[vP - NegP - TP] に「ダ」が位置するということは、「ダ」が持つとされるモダリティ機能を全く示すことができない。しかしながら、この点に関して、南(1993)には、名詞述語文は「主部が「～ハ」の形をとることが多い」(p.60)という記述も見られる。この「～ハ」は、「(～デ) ナカッタダロウ」や「(～デア) ダロウ」といったモダリティを含む提出段階に属するものであり、断定助動詞がこの提出段階の文末に生じるとすると、名詞述語文には何らかのモダリティが含まれ、それが「ダ」に含意されているとも考えられないわけではない。

¹²⁾ 述部の (アル) は、「断定助動詞」-*de-aru* の -*aru* が選択的に出現するものとして示されているものと思われる。

3.1.2 「ダ」が [vP - NegP - TP] と [ModP₂] に融合しているという立場

ここでは、「ダ」が [vP - NegP - TP] と [ModP₂] に融合しているという立場として、寺村(1984)と仁田(1999)を取り上げてみる。

寺村(1984)は、命題を「コト」、モダリティを「ムード」という用語で言い表し、概ね、<図4>のような統語的な述部の階層構造を提示している。



<図4：述部の階層構造（寺村 1984）>

寺村(1984)では、時制（確言のムード）を<コト>である命題ではなく<ムード1>というモダリティの一つに区分している。この用言の活用形は、「文の必須的な構文要素である一次的ムード」(p.65)を示し、確言的表現に基本形と過去形の対立がある。「ダ」に関しては、寺村(1984)はこれを「判定詞」と呼び、(14)のような確言のムードに<基本形/過去形>という時制の対立¹³⁾、概言のムードに<推量形/過去推量形>という時制・モダリティの対立があることを指摘している。

(14) 「ダ」の活用形（寺村 1984: 49、一部改変）

確言のムード		概言のムード	
基本形	過去形	推量形	過去推量形
ダ	ダッタ	ダロウ	ダッタロウ

(14)で示したように、寺村(1984)では、「ダ」には<基本形（現在形）/過去形>(TP)、<肯定/否定>(NegP)、<確言/概言>(ModP₂)という対立があり、これらが活用した形で出現するとしている。このことは、「ダ」に<± Neg>（否定）、<± Past>（時制）、<± realis¹⁴⁾>（事実的）といった素性が含まれていると解釈することができる。これらの活用形を形態的に分節したものが<表3>となるが、この出現順序は〔語幹—否定—時制—事実的（モダリティ）〕となり、[vP - NegP - TP - ModP₂]というコピュラ構造の階層構造と同じものとなる。

¹³⁾ コピュラ文には、「忙しい」・「忙しかった」のように判定詞を使用しない形容詞で終わるものがある。この場合の確言のムードの対立は、<i（基本形）/ -katta（過去形）>となる。

¹⁴⁾ <ダ/ダロウ>のような<断定/非断定>の対立をここでは便宜上<± realis>という素性で示すことにする。

<表 3 : 「ダ」の活用形>

	語幹	<+ Neg ¹⁵⁾ >	<± Past>	<± realis>		
確 言	<i>da</i>		ϕ	ϕ <modality>	「ダ」	<基本形>
	<i>d</i>		<i>-atta</i>	ϕ <modality>	「ダッタ」	<過去形>
	<i>zya</i>	<i>-na</i>	<i>-i</i>	ϕ <modality>	「ジャナイ」	<否定形>
	<i>zya</i>	<i>-na</i>	<i>-katta</i>	ϕ <modality>	「ジャナカッタ」	<否定過去形>
	<i>de (wa)</i>	<i>-na</i>	<i>-i</i>	ϕ <modality>	「デ (ハ) ナイ」	<否定形>
	<i>de (wa)</i>	<i>-na</i>	<i>-katta</i>	ϕ <modality>	「デ (ハ) ナカッタ」	<否定過去形>
概 言	<i>da</i>		ϕ	<i>-rou</i>	「ダロウ」	<推量形>
	<i>d</i>		<i>-atta</i>	<i>-rou</i>	「ダッタロウ」	<過去推量形>

<表 3>は、「ダ」の活用形に否定形態素 *-na* の有無（肯否）、< ϕ /*-i* / *-(k) atta*>（時制）の対立、< ϕ <modality>¹⁶⁾ / *-rou*>（モダリティ）の対立があることを示している。この「ダ」系の活用形を日本語コピュラ文の階層構造に適用してみると(15)のようになる。

$$(15) \left[\text{命題} \left[\text{命題核 PredP} - \left\{ \text{vP} \left[\text{個別事態 NegP} - \text{TP} \right] - \left[\text{モダリティ ModP}_2 \right] \right\} - \text{ModP}_1 \right] \right]$$

$$da/datta/darou/dattarou$$

しかしながら、このような判定詞「ダ」の活用形が [vP - NegP - TP - ModP₂] という構造の中に融合して現れるということについては、幾つかの問題がある。その一つは、<表 3>で示した「ダ」の活用形に否定推量形の形態が欠けていることである。このような否定推量形を敢えて挙げるとするならば、「ジャナイダロウ（デハナイダロウ）・「ジャナカッタダロウ（デハナカッタダロウ）」となるのであろうが、これは否定形の判定詞「ジャナイ（デハナイ）・「ジャナカッタ（デハナカッタ）」にさらに推量形の判定詞「ダロウ」が連続している。このように二つの判定詞が連続するという事自体にも問題があると思われるが、それにもまして、否定形は一般的に判定詞自体を否定するものであるにも係わらず、この否定推量形は後続する判定詞「ダロウ」を否定していない。

- (16) a. 大谷さんはキャプテン *zyanai*
 b. 大谷さんはキャプテン *zyanai-darou*

(16a)は「大谷さんはキャプテン *da*」という基本形の判定詞 *zya(da)* を否定しているのに対し、

¹⁵⁾ 寺村(1984)には、「ダ」の否定形の活用表は示されていないが、ここでは「デス」の否定形と Narahara(2002)を参考にして「ダ」の否定形を示している。

¹⁶⁾ 形態論の観点から、確言のモダリティ領域には音形のない ϕ <modality> があると考えられる。また、本稿では、このモダリティの種類を下付文字の < > で示す。

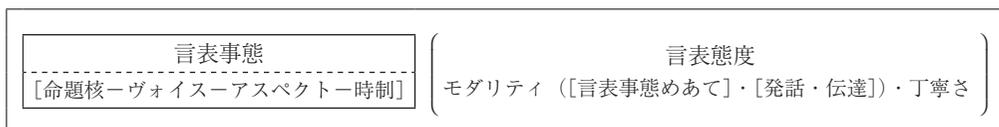
(16b)は「大谷さんはキャプテン *zyanai*」ということ推量(「ダロウ」)しているに過ぎず推量の否定形ではない。このように、寺村(1984)で示される「ダ」の体系は、概言のムードを表す否定形を欠いている。これは、そもそもコピュラ文の階層構造にNegPが存在しないということに起因するものであるが、このことについては3.1.4節で詳説することにする。

二つ目の問題点は、基本形「ダ」の過去形が「ダッタ」であるという点である。「ダ」の過去形が「ダッタ」でないことは、(17)で示すように、これらに別のモダリティ形式を後続させた場合に異なる容認度を示すことから理解できる。

- (17) a. *大谷さんはキャプテン *da-noda*
 b. 大谷さんはキャプテン *datta-noda*

(17)は、「ダ」の基本形に「ノダ」という説明のモダリティ(益岡 2007)を後続させたものである。もし基本形「ダ」の過去形が「ダッタ」であれば、共に同じ容認度を示すはずであるが、(17b)が容認されるのに対して(17a)は非文法的になる。このことは、基本形「ダ」と過去形「ダッタ」が単純な時制の交替ではないということの意味している。以上のことから、寺村(1984)が主張する「ダ」における<基本形/過去形>と<肯定/否定>の対立が活用形として出現するという主張は説得力に欠けるものとなる可能性がある¹⁷⁾。

次に、仁田(1999)は、文の意味・統語構造は命題である「言表事態」とモダリティ部分を示す「言表態度」という二つの層から成り立っているということを指摘している。この命題を示す言表事態には、<命題核>、<ヴォイス>、<アスペクト>、<時制>などといった文法カテゴリー¹⁸⁾が含まれる¹⁹⁾。一方、言表態度には<モダリティ>と<丁寧さ>という文法カテゴリーがあり、さらに、モダリティには<言表事態めあてのモダリティ>と<発話・伝達のモダリティ>という二種類のモダリティが区分される。そして、日本語の文は、この言表態度が言表事態を包み込んだ形で成立するとしている。この仁田(1999)における文の階層構造を示すと<図5>のようになる。



<図5：文の階層構造(仁田1999)>

¹⁷⁾ 「ダ」と「ダロウ」の<確言/概言>というモダリティの対立についても問題があると思われるが、このことについては3.1.4節で詳述する。

¹⁸⁾ 仁田(1999)における文法カテゴリー(仁田(1999)では「文法カテゴリー」)は、「種として異なる幾つかの文法的意味を一つの類に纏める共通する文法的意味」(p.186-187)といった意味に関わる範疇として定義されている。

¹⁹⁾ 仁田(1999)では、これ以外に<敬語性>、<みとめ方>といった文法カテゴリーを認めている。

<図5>は仁田(1999)による日本語文の意味・統語的構造を示したものであるが、仁田(1999)は言表事態に含まれる時制という文法カテゴリーを「言表事態と言表態度との分水嶺的存在」(p.18)として捉えており、時制を言表事態である命題に含めながらモダリティにも関係するものとして位置づけている。このことは、日本語においては時制に現れる要素が命題的統語機能とモダリティ的意味機能の両方の特性を有しているということを意味する。

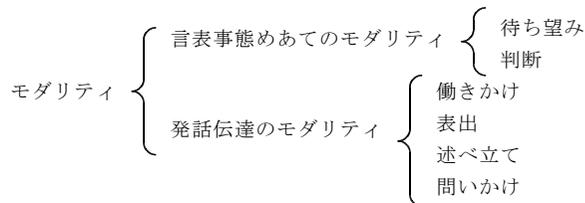
さらに、仁田(1999)は、日本語の文は「発話・伝達のモダリティを帯びることによって、はじめて言語活動の単位体的存在として機能しうる」(p.21)と主張している。これは、日本語の文は、音形の有無に関わらず、文末には何らかのモダリティ形式が必要となるということの意味している。仁田(1999)におけるモダリティとは、「現実との関わりにおける、発話時の話し手の立場からした、言表事態に対する把握のし方、および、それらについての話し手の発話・伝達の態度のあり方の表し分けに関わる文法的表現」(p.18)である。そして、仁田(1999)は、このモダリティの一つに「ダ」を位置付けている。

仁田(1999)では、発話・伝達のモダリティの下位範疇として、①<働きかけ>、②<表出>、③<述べ立て>、④<問いかけ>という4つのタイプが設定されている²⁰⁾。この中で、述べ立てのタイプに属する「ダ」は、<判断>といった認識的な言表事態めあてのモダリティを持ち、「ある事柄についての解説や判断が成り立つことについての話し手の判定」(p.40-41)を示す「判定文」を作り出す。このような判定文には、(18)のような文法的特徴が見られる。

- (18) a. 判定文のガ格には、総ての人称の名詞が来ることができる²¹⁾
 b. 判定文にはテンスの存在・分化がある
 c. 判定文は、推量系の判断のモダリティの表現形式を共起させうる
 d. 判定文は通常題目を有している²²⁾ (仁田 1999: 41-43)

(18b)の「判定文にはテンスの存在・分化がある」という判定文の文法的特徴は、時制がモダリティ部分に融合しているということの意味する。つまり、判断のモダリティを有する

²⁰⁾ 仁田(1999)におけるモダリティの下位範疇は、概ね、以下のように示すことができる。



²¹⁾ (18a)の主語に総ての人称が現れるという文法的特徴は、判定文が聞き手の存在を前提としないということの意味しており、これは言表事態めあてのモダリティの特徴の一つである。

²²⁾ (18d)の「判定文は通常題目を有している」ということは、判定文が【題目-解説】という構造を形成し、言表事態めあてのモダリティにおける<判断のモダリティ>を有していることを示している。

「ダ」には、(19)のように、＜ダ／ダッタ＞という時制の対立が含まれることになる。

(19) 美樹は、{常識家 da/datta} (仁田 1999: 42、一部改変)

これは、寺村(1984)で取り上げたような「ダ」の過去時制が「ダッタ」であるというような形態的な問題ではなく、「ダ」と「ダッタ」というモダリティ形式の内部に時制の対立が存在するというを意味する。

(18c)の「推量系の判断のモダリティとの共起」に関しては、仁田(1999)では、「スル」と「スルダロウ」の対立がある(20)のような例を挙げている。

(20) 美津は結局 {白状する／白状するだろう} (仁田 1999: 42)

仁田(1999)では、「美津は結局白状する」という文全体に判断のモダリティが存在し、この文に推量系の判断のモダリティ形式「ダロウ」が共起しているとしている。判断のモダリティが出現する統語論的位置に関する言及は仁田(1999)には全く見られないが、本稿では、判断のモダリティ形式「 $\emptyset_{\langle \text{modality} \rangle}$ 」が「スル」の後に非顕在的に現れると考える(21)。

(21) 美津は結局白状する $\emptyset_{\langle \text{modality} \rangle}$

(21)は、判断のモダリティ形式「 $\emptyset_{\langle \text{modality} \rangle}$ 」が「スル」に後続することによって判定文が成立していることを示している。そして、推量系の判断のモダリティ形式「ダロウ」は、このモダリティ形式「 $\emptyset_{\langle \text{modality} \rangle}$ 」と交替することにより出現していると考えてみる(22)。

(22) 美津は結局白状する { $\emptyset_{\langle \text{modality} \rangle}$ /darou}

(22)のように、「スル」に後続するモダリティが＜ $\emptyset_{\langle \text{modality} \rangle}$ ／ダロウ＞の交替であると仮定すると、コンピュータ文におけるモダリティは、(23)のように、＜ダ／ダロウ＞との交替ということになる。

(23) 美紀は常識家 {da/darou}

このように、「ダロウ」の出現が共起ではなく、モダリティ形式の交替であるということは、述語「スル」に後続する＜ $\emptyset_{\langle \text{modality} \rangle}$ -darou＞というモダリティ形式の共起がコンピュータ文では容認されないということから理解できる(＜*da-darou＞)。このようなことから、仁田(1999)

が指摘している判定文における「推量形のみダリティとの共起」という文法的特徴は、「判断のみダリティ形式と推量形のみダリティ形式との交替」であると修正する必要があると思われる。このことは、「ダ」と「ダロウ」が時制形式ではなく、のみダリティ形式であることを意味するが、「ダ」・「ダロウ」のみダリティ文には明らかに非過去という時制が含まれている。ここで、のみダリティ形式「ダ」・「ダロウ」に含まれている非過去時制を非過去時制のみダリティ動詞「 ϕ 」と仮定してみる ((24))。

(24) 美紀は常識家 ϕ da/darou

この考え方に従うと、時制を含めた [TP - ModP₂] の部分の「ダ」と「ダロウ」は、 $\langle \phi$ -ダ / ϕ -ダロウ \rangle というような非過去時制のみダリティ動詞を含んだのみダリティ形式の対立として示すことができる。また、「ダ」・「ダロウ」がそれ自体で時制を示さないのみダリティ形式であるとする、過去時制の場合は、(25)のように、過去時制のみダリティ動詞「ダッタ」の後にのみダリティ形式「 $\phi_{\langle \text{modality} \rangle}$ 」・「ダロウ」が出現していると考えられることができる。

(25) 美紀は常識家 datta $\phi_{\langle \text{modality} \rangle}$ /darou

このことから、判定文のみダリティの対立は(26)のように示すことができる²³⁾。

- (26) a. 非過去時制： \langle 「ダ」： ϕ -da / 「ダロウ」： ϕ -darou \rangle
 b. 過去時制： \langle 「ダッタ」： $datta$ - $\phi_{\langle \text{modality} \rangle}$ / 「ダッタダロウ」： $datta$ -darou \rangle

このように、仁田(1999)におけるのみダリティ文(判定文)は、「ダ」・「ダッタ」の内部に時制を含み、 \langle ダ / ダロウ \rangle というのみダリティの対立が存在する。このことを日本語のみダリティ文の階層構造に当てはめると(27)のようになる。

- (27) $\left[\begin{array}{l} \text{命題} \left[\begin{array}{l} \text{命題核} \text{ PredP} - \left\{ \begin{array}{l} \nu\text{P} - \left[\begin{array}{l} \text{個別事態} \text{ NegP} - \text{TP} \end{array} \right] - \left[\begin{array}{l} \text{のみダリティ} \text{ ModP}_2 \end{array} \right] - \text{ModP}_1 \\ \phi\text{-da} / \phi\text{-darou} / datta\text{-}\phi_{\langle \text{modality} \rangle} / datta\text{-darou} \end{array} \right\} \end{array} \right] \end{array} \right]$

本節では、「ダ」が [$\nu\text{P} - \text{NegP} - \text{TP}$] と [ModP₂] に融合して出現するという寺村(1984)と仁田(1999)について概観してみた。寺村(1984)においては、「ダ」(基本形)の過去や推量が活

²³⁾ [TP - ModP₂] の部分に関して、過去時制のみダリティ動詞「ダッタ」とのみダリティ形式「ダ」が共起する「*大谷さんはキャプテン datta da」は容認されないが、のみダリティ形式「ダロウ」と共起する「大谷さんはキャプテン datta darou」は容認される。このことは、「ダ」と「ダロウ」が同じ位置に出現するのみダリティ形式ではないということの意味していると思われるが、このことについては3.1.4節で詳説する。

用形として扱われており、この活用形すべてが[vP - NegP - TP - ModP₂]に融合して現れるということが主張されている。一方、仁田(1999)においては、[vP - NegP - TP - ModP₂]という階層構造に、時制とモダリティが融合して出現するということが示されている。しかしながら、このような「ダ」、「ダッタ」、「ダロウ」という形式が複数の句にまたがって融合して出現するという考え方は、それぞれの形式が派生のプロセスで個別に併合していくと考える生成文法的観点からは余り一般的ではないと言える。

3.1.3 「ダ」が ModP₂ にあるとする立場

「ダ」が ModP₂ に位置するという立場に益岡(2007)がある。益岡(2007)では、文は事態を表す<命題>と話し手の態度を表す<モダリティ>から構成され、下位分類として命題領域に<一般事態>(P1)と<個別事態>(P2)、そしてモダリティ領域に<判断のモダリティ>(M1)と<発話のモダリティ>(M2)を置く(28)のような「文の意味的階層構造」が示されている。

(28) 文の意味的階層構造：[M2 [M1 [P2 [P1] P2] M1] M2] (益岡 2007: 17)

そして、この文の意味的階層構造の述部には、<図 6>のような文法カテゴリーが出現する。

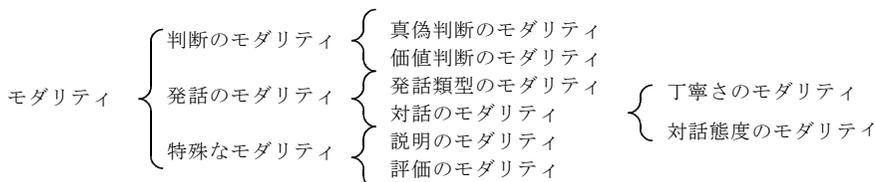
<命題>		—	<モダリティ>	
-----	-----	-----	-----	-----
一般事態の階層	個別事態の階層	-----	判断のモダリティの階層	発話のモダリティの階層
[用言の語幹・ヴォイス]	[アスペクト・テンス]	-----	[判断のモダリティ]	[発話のモダリティ]

<図 6 : 文の意味的階層構造 (益岡 2007) >

この文の意味的階層構造における<一般事態>、<個別事態>、<判断のモダリティ>、<発話のモダリティ>は、それぞれ3.1.1節で示した南(1993)の<描叙段階>、<判断段階>、<提出段階>、<表出段階>に相当する。

益岡(2007: 16)における「ダ」は、「話し手の態度を表す領域から事態に対する判断を表す」判断のモダリティ領域の下位カテゴリーである<真偽判断のモダリティ>に含まれるものとされる²⁴⁾。上位カテゴリーの判断のモダリティは、事態の現実性というものに意味的な対立

²⁴⁾ 益岡(2007)におけるモダリティの下位的タイプは、概ね、以下のようになる。



以外の「カモシレナイ」「ノヨウダ」といった「非断定」のモダリティ形式が同じモダリティ領域に現れていることから、「ダ」をモダリティ領域に出現するモダリティ形式であると位置づけることができる。

(31) a. 「断定」

大谷さんはキャプテン *da*

b. 「非断定」

大谷さんはキャプテン *darou/kamosirenai/noyouda*

このように、モダリティ形式「ダ」・「ダロウ」がモダリティ領域に位置するものであると仮定すると、[vP - NegP - TP]に出現するコピュラ動詞は非過去時制「 ϕ 」・過去時制「ダッタ」と推定することができる。ここで、(31b)の非断定モダリティ形式が出現するコピュラ文にこれらのコピュラ動詞を挿入して記述してみると(32)のようになる。

(32) a. 大谷さんはキャプテン ϕ *darou/kamosirenai/nitigainai*

b. 大谷さんはキャプテン *datta darou/kamosirenai/nitigainai*

(32a)は非過去時制コピュラ動詞「 ϕ 」、そして、(32b)は過去時制コピュラ動詞「ダッタ」に「非断定」のモダリティ形式が後続していることを示している。

しかしながら、このモダリティ形式「ダ」・「ダロウ」がどのモーダル句に出現するかということには議論の余地がある。益岡(2007)においては、モダリティの対立があるモダリティ形式「ダ」・「ダロウ」は、ModP₂に位置するものとして分析されている。一方、判定文が「推量形の判断のモダリティの表現形式と交替²⁷⁾できる」という仁田(1999)の主張からは、推量形モダリティ形式「ダロウ」がModP₂において、モダリティ形式「 $\phi_{<modality>}$ 」と交替するということが窺える。このようなことから、ModP₂において $\phi_{<modality>}$ / ダ / ダロウ」という3つのモダリティ形式の交替が生じるという解釈が可能であるが、実際にはこのような交替は不可能である。

(33) a. 大谷さんはキャプテン [TP *datta* [ModP₂ $\phi_{<modality>}$]]

b. *大谷さんはキャプテン [TP *datta* [ModP₂ *da*]]

c. 大谷さんはキャプテン [TP *datta* [ModP₂ *darou*]]

(33)は、過去時制コピュラ動詞「ダッタ」に「 $\phi_{<modality>}$ 」・「ダ」・「ダロウ」という三種類の

²⁷⁾ 3.1.2節において、仁田(1999: 42)が「共起」としていたものを「交替」と修正した。

モダリティ形式が後続している文である。文法的な文である(33a)と(33c)では、モダリティ形式「 $\phi_{\langle \text{modality} \rangle}$ 」と「ダロウ」の交替が生じているが、(33b)の過去時制コピュラ動詞「ダッタ」にモダリティ形式「ダ」が後続する文は非文法的となる。このことは、モダリティ形式「ダ」が「ダロウ」と交替しないことを意味しており、モダリティ形式「ダ」がモダリティ形式「 $\phi_{\langle \text{modality} \rangle}$ 」・「ダロウ」とは異なる統語位置に出現するものであることが示唆される。国語学・日本語学の先行研究において、(33b)の非文法性について取り上げているものは見られないが、このモダリティ形式「ダ」が出現する位置は、統語論的に「ダ」系のモダリティ体系における最大の問題点である。このことについては、4.1.節において詳細に分析することにする。

最後に、寺村(1984)だけが間接的に取り上げている否定形に関しては、本稿では非過去否定形「ジャナイ (デ (ハ) ナイ)」と過去否定形「ジャナカッタ (デ (ハ) ナカッタ)」という活用形を3.1.2節の<表3>の中で取り上げた。このような否定形は、例えば、「ジャナイ」であれば、 $[_{VP} \text{zya} [_{NegP} \text{-na} [_{TP} \text{-i}]]]$ という階層構造として示すことができる。しかしながら、3.1.2節でも述べたように、「ジャナイ」に推量のモダリティ形式「ダロウ」を後続させた「ジャナイダロウ」は、判定詞「ダロウ」自体を否定するものではない。このことから、「ジャナイ (デ (ハ) ナイ)」・「ジャナカッタ (デ (ハ) ナカッタ)」は、否定の素性を有する一つの融合した活用形態として捉えるべきであり、統語的にNegPにおいて否定辞-naを併合するものではないと考えられる。以上のことから、コピュラ文の階層構造は、個別事態にNegPを欠く(34)のように修正する必要がある。

(34) <コピュラ文の階層構造>

[命題 [命題核 PredP - vP] [個別事態 TP]] [モダリティ ModP₂ - ModP₁]

本節では、国語学・日本語学における文階層構造とモダリティの先行研究から「ダ」系のコピュラ動詞とモダリティ形式の分析を行った。その体系は(35)のように示すことができる。

(35) 「ダ」系

a. コピュラ動詞 [vP - TP]

	非過去形	過去形
肯定	ϕ	ダッタ
否定	ジャナイ (デ (ハ) ナイ)	ジャナカッタ (デ (ハ) ナカッタ)

b. モダリティ形式 [ModP₂]

断定	非断定
$\phi_{\langle \text{modality} \rangle} \cdot \text{ダ}$	ダロウ

このようなコピュラ動詞とモダリティ形式の出現位置をコピュラ文の階層構造上に示すと(36)のようになる。

$$(36) \left[\text{命題} \left[\text{命題核 PredP} - \left\{ \begin{array}{l} \text{vP} \left[\left[\text{個別事態 TP} \right] \right] \\ \phi / \text{datta/zyanai/zyanakatta} \end{array} \right\} \right] - \left[\text{モダリティ} \left\{ \begin{array}{l} \text{ModP}_2 \\ \phi / \text{modality} / \text{da/darou} \end{array} \right\} \right] - \text{ModP}_1 \right]$$

「ダ」系のコピュラ動詞には、「 ϕ 」・「ダッタ」・「ジヤナイ」・「ジヤナカッタ」という4つの形式があり ([vP - TP]、ModP₂の位置に併合するモダリティ形式「 ϕ <modality>」・「ダ」・「ダロウ」がこれらのコピュラ動詞に後続することになる。

3.2. 文の階層構造における「デス」

先行研究では、「デス」を「ダ」の丁寧形としているものと、「デス」を「ダ」とは異なるモダリティ形式として扱っているものがある。次に、それぞれの立場から「デス」を概観してみる。

3.2.1 「デス」を「ダ」の丁寧形とする立場

「デス」を「ダ」の丁寧形とする立場としては、南(1993)、寺村(1984)、益岡(2007)がある。まず、南(1993)では、「デス」が「ダ」と同じ判断段階にある選択的な断定助動詞として扱われている。このことから、「デス」の出現位置は、(37)で示すように、「ダ」と同じ[vP - TP]ということになる。

$$(37) \left[\text{命題} \left[\text{命題核 PredP} - \left\{ \begin{array}{l} \text{vP} \left[\left[\text{個別事態 TP} \right] \right] \\ \text{desu/desita} / \phi \end{array} \right\} \right] - \left[\text{モダリティ} \text{ModP}_2 - \text{ModP}_1 \right] \right]$$

(37)のように、南(1993)では、「ダ」系と同様、「デス」・「デシタ」・「 ϕ 」という三つのコピュラ動詞が[vP - TP]に出現することが示されている。しかしながら、このような「デス」をコピュラ動詞とする立場では、「デス」にある<丁寧さ>というモダリティがどこから生じるかということについての説明が困難となる。

次に、寺村(1984)では、「デス」を「ダ」と同様、「判定詞」²⁸⁾と呼び、(38)のような確言のモードに<基本形/過去形>という時制の対立、概言のモードに<推量形/過去推量形>というモダリティの対立があることが指摘されている。

²⁸⁾ 寺村(1984)は、「寒いデス」のように形容詞に後続する「デス」を助動詞「デス」とし、判定詞「デス」とは区別している。

(38) 「デス」の活用形 (寺村 1984: 49、一部改変)

確言のモード		概言のモード	
基本形	過去形	推量形	過去推量形
デス	デシタ	デショウ	デシタロウ ²⁹⁾

また、肯定・否定に関しては、判定詞「デス」に(39)のような活用形がある。

(39) 「デス」の否定形 (寺村 1984: 54、一部改変)

	現在	過去
肯定	デス	デシタ
否定	デハアリマセン	デハアリマセンデシタ

(38)・(39)で示したように、寺村(1984)では、「デス」は、「ダ」と同様、〈基本形(現在形)／過去形〉(TP)、〈肯定／否定〉(NegP)³⁰⁾、〈確言／概言〉(ModP)という対立があり、これらが形態論的に分節しない活用形として出現するとしている。但し、「デス」の場合、語幹 *d* の後に *-es* という丁寧さを示す形態素が後続する。これを〈Polite〉という素性として表記し、確言のモードと概言のモードの「デス」の形態素の配列を示す(〈表5〉)。

〈表5 : 「デス」系の活用形〉

	語幹	<+Polite>	<+Neg>	<±Past>	<±realis>		
確言	<i>d</i>	<i>-es</i>		<i>-u</i>	\emptyset <modality>	「デス」	<基本形>
	<i>d</i>	<i>-es</i>		<i>-ita</i>	\emptyset <modality>	「デシタ」	<過去形>
	<i>dewa-ar</i>	<i>-ima</i>	<i>-sen</i>	ϕ	\emptyset <modality>	「デハアリマセン」	<否定形>
	<i>dewa-ar</i>	<i>-ima</i>	<i>-sen</i>	<i>-d-es-ita</i>	\emptyset <modality>	「デハアリマセンデシタ」	<否定過去形>
概言	<i>d</i>	<i>-es</i>		ϕ	<i>-you</i>	「デショウ」	<推量形>
	<i>d</i>	<i>-es</i>		<i>-ta</i>	<i>-rou</i>	「デシタロウ」	<過去推量形>

〈表5〉で示した「デス」における形態素の出現順序は、[語幹ー丁寧さー否定ー時制ー事實的(モダリティ)]となる。これを句として配列し直すと、[PredP - ν P - NegP - PoliteP - TP - ModP₂ - ModP₁]となり、 ν Pの後にTPの内部にあると考えられるPolitePを追加するこ

²⁹⁾ 寺村(1984)では、過去推量形として「デシタロウ」という形式を挙げているが、『岩波国語辞典第八版』の「です」の項には『『でしたらう』は次第に使われなくなり、代わりに『でしたでしょう』と言う』とある。現在では、「デシタロウ」が実際に使用されているとは思われないため、これについてはこれ以上扱わないこととする(このことを指摘していただいた査読者の方に深く感謝申し上げる)。

³⁰⁾ 寺村(1984)では、「デハアリマセン」と「デハアリマセンデシタ」が否定形として挙げられているが、この活用形の丁寧さを表す部分は「マス」であり「デス」ではない。このことから、「ダ」と同様、「デス」のコピュラ構造においてもNegPは存在しないものとする方が自然であると思われる。

とにより「デス」のモダリティ形式 *-es* が出現することになる。このように、「デス」が「ダ」の丁寧形であるという寺村(1984)の主張は、TPの前に PoliteP が追加されることによって実現することになる。この寺村(1984)の「デス」系の出現位置をコピュラ文の階層構造に示すと(40)のようになる。

$$(40) \left[\text{命題} \left[\text{命題核 PredP} - \left\{ \begin{array}{l} \text{vP} - [\text{個別事態 PoliteP} - \text{TP}] - [\text{モダリティ ModP}_2] \\ \text{desu/desita/desyou} \end{array} \right\} - \text{ModP}_1 \right] \right]$$

最後に、益岡(2007)では、〈ダ/デス〉を〈普通体/丁寧体〉という形式的な対立として捉えている。これは、「ダ」という無標形式に対して、有標形式が「デス³¹⁾」であるということの意味する。しかし一方で、益岡(2007)は、意味機能において、「デス」は〈発話のモダリティ〉(ModP₁)の下位範疇である〈対話のモダリティ〉のさらに下位範疇である「対話文において聞き手に対する丁寧さの有無を表す」〈丁寧さのモダリティ〉に属するものとしていいる。これは、「デス」が形式としては個別事態(TP)に出現するが、意味機能上はモダリティ領域に属するということを意味している。このことをコピュラ文の階層構造に示したものが(41)となる。

$$(41) \left[\text{命題} \left[\text{命題核 PredP} - \left\{ \begin{array}{l} \text{vP} - [\text{個別事態 PoliteP} - \text{TP}] \\ \text{desu} \end{array} \right\} \right] - [\text{モダリティ ModP}_2 - \left\{ \begin{array}{l} \text{ModP}_1 \\ \text{○}^{32)} \end{array} \right\}] \right]$$

(41)のように、「デス」は、形式的に[vP - PoliteP - TP]に位置するが、意味機能上、丁寧さのモダリティを示す ModP₁にあるということになる。

3.2.2 「デス」と「ダ」を異なるモダリティ形式とする立場

「デス」が「ダ」と異なるモダリティ形式であると主張する立場に仁田(1999)がある。仁田(1999)においては、「デス」は「ダ」の丁寧形というものではなく、言表態度にある〈丁寧さ〉という文法カテゴリーに属するものである。仁田(1999)によると、言表態度の形式に

³¹⁾ 益岡(2007)は、「デス」に名詞・ナ形容詞に付く「デス1」とイ形容詞に付く「デス2」という区別が必要であると指摘している。これらの「デス」の違いは、過去の形が取れるかどうかという結合の問題に見られる。

i) a. 大谷さんはキャプテン ↓*desu/desita*

b. 大谷さんは美しい ↓*desu/*desita*

「デス1」である (ia) が過去形になるのに対して、(ib) の「デス2」は過去形になることができない。また、統語的出現位置についても、「デス1」がTPの左の個別事態の中に出現するのに対して、「デス2」はモダリティ領域に出現するという違いがある。

³²⁾ ○は、意味機能上のモダリティ位置を示している。

は、① 言表態度そのものの非存在を表す「否定」になることがない、② 第三者や聞き手の言表態度になることがない、③ 過去になることがない、といった特徴がある。①の「『否定』になることがない」というのは、3.1.4節で考察したように、コピュラ文の階層構造に NegP が存在しないということに通じる。③の「過去になることがない」ということは、「デシタ」が「デス」の過去を表していないということの意味する。

(42) 大谷さんはキャプテン *des-ita*

(42)は文全体として過去の事態を示すが、丁寧形「デス」の過去を表しているわけではない。つまり、(42)は「大谷さんがキャプテン」であるという命題が過去に存在したということを表すだけで、「デス」で示されるモダリティの過去を示してはいない。このことは、統語的に TP にある過去時制辞 *-ita* は、PoliteP にある *des-*ではなく、vP にあるコピュラ動詞と関係しているということの意味する。この vP にあるコピュラ動詞が音形のない非過去時制コピュラ動詞「 ϕ 」であると仮定すると、このコピュラ動詞が TP に移動することによって文全体が過去時制を示すと考えることができる ((43))。

(43) 大谷さんはキャプテン $[_{vP} \phi [_{PoliteP} des [_{TP} \phi -ita]]]$

同じことは、非過去時制を表す「デス」のコピュラ文にも当てはまる ((44))。

(44) 大谷さんはキャプテン $[_{vP} \phi [_{PoliteP} des [_{TP} \phi -u]]]$

つまり、「デス」と「デシタ」は、vP に非過去時制コピュラ動詞「 ϕ 」、PoliteP に〈丁寧さ〉を示す *des*、そして、TP に非過去時制辞 *-u* または過去時制辞 *-ita* があり、vP の非過去時制コピュラ動詞「 ϕ 」が TP に移動することによって派生していることになる。このような「デス」・「デシタ」は、命題部分である言表事態における統語的な操作によって派生するが、同時に言表態度の〈丁寧さ〉というモダリティ機能も表出している。このモダリティを示す言表態度は、「言表事態を包み込むといったあり方をもって存在している」(仁田 1999: 186)のために、モダリティ領域には形式としては現れないが、[ModP₂ - ModP₁]に意味機能として存在するものとして捉えることができる。このことをコピュラ文の階層構造に示してみると(45)のようになる。

(45) $[_{命題} [_{命題核} PredP - \left\{ \begin{array}{c} vP \\ \phi \end{array} \right\}] - [_{個別事態} \left\{ \begin{array}{c} PoliteP \\ des \end{array} \right\} - \left\{ \begin{array}{c} TP \\ -u/-ita \end{array} \right\}]] - [_{モダリティ} \left\{ \begin{array}{c} ModP_2 - ModP_1 \\ \circ \end{array} \right\}]$

3.2.3 先行研究から見る「デス」系の述部の階層構造とモダリティ形式

ここまで、「デス」を「ダ」の丁寧形とする立場と「デス」と「ダ」が異なるモダリティ形式であるという二つの立場から「デス」を概観してきた。ここでは、まず、これらの先行研究における「デス」のモダリティに関する記述を確認する（〈表6〉）。

〈表6〉：先行研究における「デス」のモダリティ

南 (1993)	断定助動詞
寺村 (1984)	確言のムードを表す判定詞（丁寧）
仁田 (1999)	言表態度にある丁寧さという文法カテゴリー
益岡 (2007)	発話のモダリティ領域の下位カテゴリーである対話のモダリティのさらに下位カテゴリーの丁寧さのモダリティ

〈表6〉からは、「デス」に〈丁寧さ〉というモダリティがあることが理解できる。このような「デス」が出現するコンピュータ文における述部の階層構造を確立するためには、「デス」の形態統語論的な側面と意味機能上の問題を分けて考える必要がある。まず、形態統語論的な側面から、寺村(1984)と仁田(1999)において考察した(46)と(47)で示す階層構造を分析してみる。

(46) 寺村(1984)

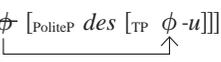
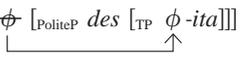
[_{VP} *d* [_{PoliteP} *-es* [_{TP} *-u/-ita*]]]

(47) 仁田(1999)

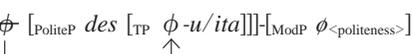
[_{VP} ϕ [_{PoliteP} *des* [_{TP} *-u/-ita*]]]

(46)と(47)の違いは、どのような形態をコンピュータ動詞としているかということにある。寺村(1984)においては、コンピュータ動詞を「ダ」系と同じ *d* という語幹に設定しているのに対して、仁田(1999)では、非過去時制コンピュータ動詞「 ϕ 」であると分析できる。寺村(1984)のコンピュータ動詞が語幹 *d* であるという主張は、以下の二点から否定される。まず、コンピュータ動詞が語幹 *d* であるとするならば、モダリティ形式「ダ」がコンピュータ動詞の一部を担うことになる。これは、3.1.4節で指摘した「ダ」がコンピュータ動詞ではなく、ModP₂に出現するモダリティ形式であるということに矛盾する。二点目は、仁田(1999)が言表態度は「過去になることがない」と指摘しているように、「デシタ」は「デス」で表されるモダリティの過去を示すわけではない。これらのことから、本稿では、仁田(1999)から分析される(47)を形態統語論的な「デス」・「デシタ」の階層構造と考えることにする。コンピュータ動詞の機能の一つである「時制の標示」については、3.2.2節で述べたように、TPにある時制辞 *-u/-ita* と TP

に移動する非過去時制コピュラ動詞「 ϕ 」とによって、非過去時制 ((48a))・過去時制 ((48b)) が示されるものと思われる。

- (48) a. 非過去時制 : $[_{VP} \phi [_{PoliteP} des [_{TP} \phi -u]]]$

- b. 過去時制 : $[_{VP} \phi [_{PoliteP} des [_{TP} \phi -ita]]]$


次に、「デス」の意味機能上の問題であるが、「デス」にあるモダリティは統語論の観点からはモーダル句で実現されるものである。これは、仁田(1999)が言表態度にある「言表事態めあてのモダリティと発話・伝達のモダリティとは、ともに文にとって必須」(p.19-20)であり、その言表態度の構成に関わる文法カテゴリーが<丁寧さ>と<モダリティ>であると述べていることと関連する。つまり、仁田(1999)における言表事態(本稿での個別事態)の後には、言表態度(本稿でのモダリティ)にある丁寧さ・モダリティの文法カテゴリーが必ず後続する。この言表態度に表れる文法カテゴリーをモダリティ形式「 $\phi_{<politeness>}$ 」として「デス」・「デシタ」の階層構造を示したものが(49)となる。

- (49) $[_{VP} \phi [_{PoliteP} des [_{TP} \phi -u/ita]]] [_{ModP} \phi_{<politeness>}]$


以上のことから、国語学・日本語学の先行研究から概観する「デス」系のコピュラ動詞とモダリティの体系は、(50)のように示すことができる。

(50) 「デス」系

- a. コピュラ動詞³³⁾ $[_{vP} - PoliteP - TP]$

非過去形	過去形
デス [$\phi -des-u$]	デシタ [$\phi -des-ita$]

- b. モダリティ形式 $[_{ModP_2} - ModP_1] : \phi_{<politeness>}$

そして、このようなコピュラ動詞とモダリティ形式をコピュラ文の階層構造に示すと(51)のようになる。

³³⁾ 厳密にはコピュラ動詞は vP に出現する「 ϕ 」であるが、ここでは、便宜上、 $[_{vP} - PoliteP - TP]$ に出現するものをコピュラ動詞と呼ぶことにする。

$$(51) \left[\text{命題} \left[\text{命題核} \text{PredP} - \left\{ \begin{array}{c} \nu\text{P} \\ \phi \end{array} \right\} \right] \left[\text{個別事態} \left\{ \begin{array}{c} \text{PoliteP} \\ des \end{array} \right\} - \left\{ \begin{array}{c} \text{TP} \\ -u/-ita \end{array} \right\} \right] \right] - \left\{ \begin{array}{c} \text{モダリティ} \text{ModP}_2 - \text{ModP}_1 \\ \phi_{\langle \text{politeness} \rangle} \end{array} \right\} \right]$$

「デス」系は、(51)で示したように、 νP に出現するコピュラ動詞「 ϕ 」、PolitePには *des*、TPには *-u/-ita* が位置し、これにモダリティ形式「 $\phi_{\langle \text{politeness} \rangle}$ 」が ModP に後続していることになる。

4. 日本語コピュラ文の階層構造

前節では、文階層構造やモダリティを扱っている国語学・日本語学の先行研究から、「ダ」系と「デス」系が出現するコピュラ文の述部の階層構造とモダリティ形式を考察した。その体系をここに(52)・(53)として再掲する。

(52) 「ダ」系

a. コピュラ動詞 [νP - TP]

	非過去形	過去形
肯定	ϕ	ダッタ
否定	ジャナイ (デ (ハ) ナイ)	ジャナカッタ (デ (ハ) ナカッタ)

b. モダリティ形式 [ModP₂]

断定	非断定
$\phi_{\langle \text{modality} \rangle} \cdot \text{ダ}$	ダロウ

(53) 「デス」系

a. コピュラ動詞 [νP - PoliteP - TP]

非過去形	過去形
デス [ϕ - <i>des-u</i>]	デシタ [ϕ - <i>des-ita</i>]

b. モダリティ形式 [ModP₂ - ModP₁] : $\phi_{\langle \text{politeness} \rangle}$

(52)・(53)は、国語学・日本語学の文階層構造とモダリティの先行研究を検討することにより導き出したコピュラ動詞とモダリティ形式の体系である。しかしながら、この体系では十分に説明できない問題がまだ幾つか残っている。本節では、(52)・(53)の体系の問題点をさらに分析することにより、より精緻な日本語コピュラ文の階層構造を提案していく。

4.1. モダリティ形式「ダ」の統語的位置

(52b)で示した ModP_2 に出現する「ダ」系のモダリティ形式は、「 $\phi_{\langle \text{modality} \rangle}$ 」・「ダ」・「ダロウ」の三種類である。この三種類のモダリティ形式が非過去時制コピュラ動詞「 ϕ 」と共に出現する構造は、(54)のように示すことができる。

- (54) a. 大谷さんはキャプテン [$\text{TP } \phi$ [$\text{ModP}_2 da$]]
 b. ?大谷さんはキャプテン [$\text{TP } \phi$ [$\text{ModP}_2 \phi_{\langle \text{modality} \rangle}$]]
 c. 大谷さんはキャプテン [$\text{TP } \phi$ [$\text{ModP}_2 darou$]]

そして、(54)が過去時制コピュラ動詞「ダッタ」と交替する構造は(55)のようになる。

- (55) a. *大谷さんはキャプテン [$\text{TP } datta$ [$\text{ModP}_2 da$]]
 b. 大谷さんはキャプテン [$\text{TP } datta$ [$\text{ModP}_2 \phi_{\langle \text{modality} \rangle}$]]
 c. 大谷さんはキャプテン [$\text{TP } datta$ [$\text{ModP}_2 darou$]]

(54)と(55)を見ると、コピュラ動詞が交替しても容認されるのはモダリティ形式「ダロウ」だけで、モダリティ形式「 $\phi_{\langle \text{modality} \rangle}$ 」は非過去時制では容認度が下がり、モダリティ形式「ダ」は過去時制コピュラ動詞「ダッタ」と共起すると非文法的となる³⁴⁾。

(55a)の過去時制コピュラ動詞「ダッタ」とモダリティ形式「ダ」の統語連続が非文法的になることは、3.1.4節でも指摘したが、モダリティ形式「ダ」とモダリティ形式「 $\phi_{\langle \text{modality} \rangle}$ 」・「ダロウ」が異なる統語位置に出現するということが示唆される。〈 $\phi_{\langle \text{modality} \rangle}$ / ダロウ〉の交替が ModP_2 で起こると仮定すると、モダリティ形式「ダ」は、これらとの交替が容認される ModP_2 ではなく、 ModP_2 より後の ModP_1 に出現するモダリティ形式と捉えることができる((56))。

- (56) a. 大谷さんはキャプテン [$\text{TP } \phi$ [$\text{ModP}_2 \phi_{\langle \text{modality} \rangle}$ [$\text{ModP}_1 da$]]]
 b. *大谷さんはキャプテン [$\text{TP } datta$ [$\text{ModP}_2 \phi_{\langle \text{modality} \rangle}$ [$\text{ModP}_1 da$]]]

この場合も、当然ながら、(56a)の非過去時制コピュラ文は文法的となるが、(56b)の過去時制コピュラ文は非文法的となる。(56)の構造におけるこれらの容認度の違いは、井上(2007b)が指摘する「時制辞の『る』『た』は、話し手による発話内容の認定(confirmation)というモード」(p.242)を持つということに関連があると思われる。つまり、時制辞を含むコピュラ動

³⁴⁾ [*大谷さんはキャプテン *zyanai/zyanakatta da*] のように否定コピュラ動詞が「ダ」に先行することも許容されない。

詞「ダッタ」(時制辞「タ」)は、話し手の発話内容を認定するモダリティ³⁵⁾を含んでおり、これがModP₁にあるモダリティ形式「ダ」の<断定>というモダリティ³⁶⁾との意味的な制約に抵触し非文法的になるということが推察される³⁷⁾。

(57) * $[_{TP} \text{datta}_{<confirmation>} \underbrace{[_{ModP2} \phi_{<modality>} [_{ModP1} \text{da}_{<assertion>}]]}_{\times}]$

また、井上(2007b)では、この認定のモダリティの後に「音形的にゼロの断定(assertion)か推量の認識モーダル³⁸⁾のいずれかが任意に加わり、発話伝達のゼロ形式のモーダルの『伝達』³⁹⁾に繋がられて文が成立する」(p.242)としている。そしてさらに、「文が成立するには、発話伝達のモーダルの中のどれかを1つ選ばなければならない」(p.243)とも述べている。このことを本稿で用いているコピュラ文の階層構造に適用してみると、ModP₂には任意に出現するモダリティ形式< $\phi_{<assertion>}$ /ダロウ>の交替が起こり、ModP₁には義務的にモダリティ形式< $\phi_{<transmission>}$ /ダ>が出現するということになる。これに従って、過去時制コピュラ文の構造を記述してみたものが(58)である。

(58) a. 大谷さんはキャプテン $[_{TP} \text{datta} [_{ModP2} \phi_{<assertion>}/\text{darou} [_{ModP1} \phi_{<transmission>}]]$
 b. *大谷さんはキャプテン $[_{TP} \text{datta} [_{ModP2} \quad \quad \quad [_{ModP1} \text{da}]]]$

(58a)の過去時制コピュラ文は、ModP₂でモダリティ形式「 $\phi_{<assertion>}$ 」と「ダロウ」の選択が行われ、ModP₁にモダリティ形式「 $\phi_{<transmission>}$ 」が義務的に出現して文が成立する。(58b)のような過去時制コピュラ動詞「ダッタ」とモダリティ形式「ダ」の共起については、時制を標示するモダリティ形式「ダッタ」に認定のモダリティが含まれるため、意味的制約により断定のモダリティ形式「ダ」と共起できないものと考えられる⁴⁰⁾。

このような意味的制約により過去時制コピュラ動詞「ダッタ」と共起ができないモダリティ形式「ダ」は、非過去時制コピュラ動詞「 ϕ 」とは共起できることから、ModP₁ではなく、ModP₂に位置している可能性も考えられる ((59))。

³⁵⁾ 「話し手の発話内容を認定するモダリティ」を下付文字の <confirmation> で表す。

³⁶⁾ 「モダリティ形式「ダ」の<断定>モダリティ」を下付文字の <assertion> で表す。

³⁷⁾ 非過去時制コピュラ文の場合は、コピュラ動詞が音形のない「 ϕ 」であるため、この認定のモダリティを含まない。このため、(56a)は、文法的となると考えられる。

³⁸⁾ 本稿でのモダリティ形式「 $\phi_{<modality>}$ 」・「ダロウ」がこれらに相当する。

³⁹⁾ 「発話伝達のゼロ形式のモダリティ」を下付文字の <transmission> で表す。

⁴⁰⁾ このようなことは、時制辞「ル」の場合においても同様のことが指摘できる。

i) *大谷さんは白状 *suru/sita da*

(i)は、時制辞 *-u/-ita* に認定のモダリティが含まれるため、意味的制約によりモダリティ形式「ダ」と共起できないものと考えられる。

- (59) a. 大谷さんはキャプテン [TP ϕ [ModP₂ *da* [ModP₁ ϕ _{<transmission>}]]
 b. 大谷さんはキャプテン [TP ϕ [ModP₂ [ModP₁ *da*]]

(59)のどちらの構造が正しいかの判断材料として、ここでは、(59)に疑問マーカー「カ」を付けた(60)の疑問コピュラ文を取り上げてみる⁴¹⁾。

- (60) a. *大谷さんはキャプテン [TP ϕ [ModP₂ *da* [ModP₁ *ka*]] ?
 b. *大谷さんはキャプテン [TP ϕ [ModP₂ [ModP₁ *da-ka*]] ?
 (61) 大谷さんはキャプテン [TP ϕ [ModP₂ ϕ _{<assertion>}/darou [ModP₁ *ka*]] ?

「*大谷さんはキャプテン *da-ka*」は(60)の何れの構造であっても非文法的であるが、ModP₂にモダリティ形式「 ϕ _{<assertion>}」・「ダロウ」が出現する(61)が文法的であることを考えると、モダリティ形式「ダ」は(60a)のようなModP₂に出現する要素ではないことになる⁴²⁾。このことから、ModP₁におけるモダリティ形式「ダ」と疑問マーカー「カ」の重出により非文法的となる(60b)の構造の方が妥当であると考えられる⁴³⁾。従って、モダリティ形式「ダ」と疑問マーカー「カ」は、ModP₁において<断言/疑問>というモダリティの対立を示し、モダリティ形式の交替によって出現していると言える((62))。

- (62) 大谷さんはキャプテン [TP ϕ [ModP₂ [ModP₁ *da/ka*]]]

ここまでで示したModP₁に出現する要素は、モダリティ形式「 ϕ _{<transmission>}」・「ダ」と疑問マーカー「カ」であるが、このModP₁に出現する要素は、先述した(54b)のような非過去時制コピュラ文の容認度が下がることとも関連する。

- (63) a. ?大谷さんはキャプテン [TP ϕ [ModP₂ [ModP₁ ϕ _{<transmission>}]]] (= (54b))
 b. 大谷さんはキャプテン [TP ϕ [ModP₂ [ModP₁ *da*]]]

過去時制コピュラ動詞「ダッタ」には認定のモダリティが含まれるため、意味的制約によりモダリティ形式「ダ」と共起できないことは先に言及した通りである。これとは異なり、(63a)で示したコピュラ文においては、音形のない非過去時制コピュラ動詞「 ϕ 」に認定のモダリ

⁴¹⁾ 便宜上、疑問マーカー「カ」をここではModP₁に出現する要素と考えることにする。

⁴²⁾ コピュラ動詞が非過去時制「 ϕ 」であるため、意味的な制約も課されない。

⁴³⁾ 疑問マーカー「カ」が出現しない文末を上昇調にする疑問文においても、「大谷さんはキャプテンだろう?」「大谷さんはキャプテン?」が文法的となり、「*大谷さんはキャプテンだ?」が非文法的となる。

ティが含まれないことと、ModP₁におけるモダリティ形式「 $\phi_{\langle \text{transmission} \rangle}$ 」に音形がないことが起因してコンピュータ文としての容認度が下がるものと考えられる。これは、(64)のようにModP₁に疑問マーカー「カ」が生じると完全に文法的になることから理解できる。

(64) 大谷さんはキャプテン [TP ϕ [ModP₂ [ModP₁ ka]]] ?

以上、本節で考察した「ダ」系の述部の階層構造を一般化して示すと(65)のようになる。

(65) [TP ϕ /datta [ModP₂ $\phi_{\langle \text{assertion} \rangle}$ /darou [ModP₁ $\phi_{\langle \text{transmission} \rangle}$ /da/ (ka)]]

(65)は、「ダ」系のコンピュータ動詞が「 ϕ 」・「ダッタ」であり、その後にModP₂として「 $\phi_{\langle \text{assertion} \rangle}$ 」・「ダロウ」、ModP₁として「 $\phi_{\langle \text{transmission} \rangle}$ 」・「ダ」・「カ」が連続することを示している。このことから、3.1.4節で設定した「ダ」系の体系を(66)のように修正する。

(66) 「ダ」系 (修正)

a. コンピューラ動詞 [vP - TP]

	非過去形	過去形
肯定	ϕ	ダッタ
否定	ジャナイ (デ (ハ) ナイ)	ジャナカッタ (デ (ハ) ナカッタ)

b. モダリティ形式 [ModP₂ - ModP₁]

[ModP ₂]		[ModP ₁]	
断定	非断定	伝達	断言・疑問
$\phi_{\langle \text{assertion} \rangle}$	ダロウ	$\phi_{\langle \text{transmission} \rangle}$	ダ・カ

4.2. 従属節における「ダ」・「デス」

ここまでは、主節におけるコンピュータ文についての考察を行ってきたが、本節では、従属節の階層構造と従属節に出現する「ダ」・「デス」についての分析を試みる。まず、コンピュータ文が従属節に出現する例として(67)を挙げる。

(67) a. 監督は[大谷さんがキャプテン ϕ /da と]思っている

b. 監督は[大谷さんがキャプテン *datta* と]思っている

(67a)は非過去時制コンピュータ文、(67b)は過去時制コンピュータ文が従属節に現れている。このような従属節に出現する「ダ」を主節における「ダ」と異なるものとして扱っている先行研究に森川(2009)がある。森川(2009)は、主節に用いられる「ダ」を「話し手 (又は書き手) の

判断を主張する又は明言する」(p.15) <断言>モダリティ表現であると述べている。一方、従属節で用いられる「ダ」については、(67)で言えば、「大谷さんがキャプテンである(こと)」の客観的叙述を単に表現する「英語の客観的叙述表現を表すコピュラ(copula)に対応する繫辞」(p.16)であると指摘している。確かに、(67)の従属節にあるコピュラ文では、主節ではあり得ない<φ・ダ/ダッタ>というコピュラ動詞の時制の対立が生じているように見える。しかしながら、この従属節に出現する「ダ」がコピュラ動詞であるとする、非過去時制コピュラ動詞「φ」との違いが説明できない。また、従属節に現れる「ダ」には、森川(2009)が<断定>と呼んでいるモダリティの意味機能が間違いなく存在する。この「ダ」にモダリティが存在することは、(68)のように、「ダ」を非断定のモダリティ形式「ダロウ」と交替させると<断定/非断定>のモダリティの対立が生じることからも理解できる。

- (68) a. 監督は [大谷さんがキャプテン *da* と] 思っている
 b. 監督は [大谷さんがキャプテン *darou* と] 思っている

このことから、従属節に現れる「ダ」は、非過去時制コピュラ動詞ではなく、断定のモダリティ形式であると位置づけることができる。この断定のモダリティを示す従属節の「ダ」は、主節で断言のモダリティを示す「ダ」とは大きく異なる。従属節に出現するモダリティ形式の「ダ」は、「ダロウ」との交替が可能であることから分かるように、ModP₂に出現する形式である。従って、(68)の従属節の述部の階層構造は(69)のように示せる。

- (69) 監督は [_{CP} 大谷さんがキャプテン [_{TP} φ/*datta*]]_{[ModP₂ *da/darou*] と] 思っている⁴⁴⁾}

次に問題となるのは、従属節CPがどのようなモーダル句を含むかということである。まず、(70)のように、終助詞「ネ」などが従属節に出現できないことから、ModP₁が従属節CPのレイヤーに存在しないことは自明である。

- (70) *監督は [_{CP} 大谷さんがキャプテン [_{TP} *datta*]]_{[ModP₁ *ne*] と] 思っている}

ModP₂については、「ダ」・「ダロウ」が従属節に出現している(68)の例から、従属節CPレイヤーに存在することは確認できるが、さらなる検証として、「ダロウ」に加えて他の非断定のモダリティ形式を挿入したものが(71)である。

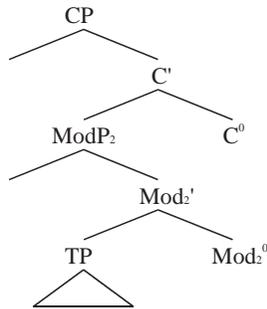
⁴⁴⁾ 過去時制コピュラ動詞「ダッタ」とモダリティ形式「ダ」の共起については、主節に出現する「ダ」と同様、時制を表示する部分に認定のモダリティが含まれるため、意味的制約により「*ダダロウ」という共起が起こらない。

- (71) a. 監督は [CP 大谷さんがキャプテン [TP *datta*] [ModP₂ *darou*] と] 思っている
 b. 監督は [CP 大谷さんがキャプテン [TP *datta*] [ModP₂ *kamosirenai*] と] 思っている
 c. 監督は [CP 大谷さんがキャプテン [TP *datta*] [ModP₂ *nitigainai*] と] 思っている

(71)は、語用論的な問題で多少のぎごちなさは感じるが、十分に容認できる文であると言って良いと思われる。

以上のことから、従属節 CP は、主節 CP にある ModP₁を欠いた(72)のような統語構造を有すると指摘できる。

- (72) 従属節 CP の統語構造



次に、このような従属節 CP の統語構造から、(73)で示す従属節に「デス」が出現する構造を考えてみる。

- (73) * 監督は [CP 大谷さんがキャプテン *desu* と] 思っている

3.2.3節において、非過去時制コピュラ動詞「デス」[ϕ -*des-u*]は、[ModP₂ - ModP₁]の位置にモダリティ形式「 ϕ <politeness>」が生じるということを論じた。3.2.3節では、このモダリティ形式「 ϕ <politeness>」が ModP₂と ModP₁のどちらに位置するモダリティ形式であるかについては考察しなかったが、(73)が非文法的となるということは、ここで設定した従属節 CP の統語構造から考えて、モダリティ形式「 ϕ <politeness>」は ModP₂ではなく ModP₁に出現するものであると言える。つまり、従属節 CP のレイヤーには ModP₁が存在しないため、「デス」の ModP₁に位置するモダリティ形式「 ϕ <politeness>」を容認しないと解釈できる ((74))。

- (74) * 監督は [CP 大谷さんがキャプテン [TP *desu*][ModP₁ ϕ <politeness>] と] 思っている

このことから、3.2.3節で設定した「デス」系のコピュラ動詞とモダリティ体系を(75)のように修正する必要がある。

(75) 「デス」系

a. コピュラ動詞 [vP - PoliteP - TP]

非過去形	過去形
デス [ϕ -des-u]	デシタ [ϕ -des-ita]

b. モダリティ形式 [ModP₁] : ϕ <politeness>

以上、本節では、従属節に出現するモダリティ形式「ダ」を主節のモダリティ形式「ダ」と異なるものとして考察し、主節の「ダ」が ModP₁に出現する断言のモダリティ形式、従属節の「ダ」が ModP₂に出現する断定のモダリティ形式であるということを指摘した。そして、従属節 CP は、主節 CP の ModP₁を欠く(76)のような統語構造を持つことを示した。

(76) [CP [ModP₂ [TP] Mod₂⁰] C⁰]

4.3. ModP₂ に位置する疑似モダリティ形式

本節では、ModP₂に位置する疑似モダリティ形式を分析することにより、日本語コピュラ文の階層構造を考察してみる。仁田(1999)は、「言表事態や発話・伝達のあり方をめぐっての発話時における話し手の心的態度の言語表現」(p.52)を真の典型的なモダリティとして<真正モダリティ>と呼んでいる。このような真正モダリティは、① 過去、② 話し手以外の心的態度に言及、③ 態度そのものの非存在を表す否定、といった要件が欠如したものとされる。これとは異なり、『発話時における』『話し手の』といった要件(p.52)から外れた心的態度の表現である<疑似モダリティ>というものがある。疑似モダリティ形式は、言表事態めあてのモダリティ(ModP₂)にあり、真正モダリティ形式とは異なって、(77)のように、① 過去、② 話し手以外の心的態度、③ 否定、を表すことが可能である。

(77) ① 過去

かれはそこを勘違いしているようだった た (仁田 1999: 54)

② 話し手以外の心的態度

彼によれば、明日の海は大荒れになるかもしれないそうだ (仁田 1999: 56)

③ 否定

雨は降りそうで ない (仁田 1999: 55)

また、井上(2007b)では、仁田(1999)で示された疑似モダリティ形式の特徴に、④ 真正モダリティを加えて重出可能であること、⑤ 先行文に定形時制辞を許すこと、を加えている((78))。

(78) ④ 重出

この伝言はオフィスからにちがいない ようです (井上 2007b: 245)

⑤ 先行文に定形時制辞

佐藤さんの認容が拒否されたのだろう (井上 2007b: 245)

ここでは、上記のような特徴を持つ疑似モダリティ形式がコンピュータ文に出現する場合、その階層構造はどのようなものになるかについて考察してみる。[主語ー述語]という小節(small clause)に後続する疑似モダリティ形式は、その結合の仕方により3種類に分類することができる((79))。

(79) a. 大谷さんはキャプテン *mitaida/rasii/kamosirenai/nitigainai* (疑似モダリティ形式 A)

b. 大谷さんはキャプテン *na-no-da/-darou/-kamosirenai* (疑似モダリティ形式 B)

c. 大谷さんはキャプテン *no-youda/-hazuda/-hougayoi* (疑似モダリティ形式 C)

(79a)は、「大谷さんがキャプテン」という小節に疑似モダリティ形式 A が直接後続するものである。これらは文全体で非過去時制を表すことから、TP に非過去時制コンピュータ動詞「 ϕ 」が出現していると考えられる。このことは、(80)のように、これらが過去時制コンピュータ文となった場合、「ダッタ」と交替していることから理解できる。

(80) a. 大谷さんはキャプテン ϕ *mitaida/rasii/kamosirenai/nitigainai*

b. 大谷さんはキャプテン *datta mitaida/rasii/kamosirenai/nitigainai*

(79b)は、「大谷さんがキャプテン」という小節に *na-no* という要素を挟んで疑似モダリティ形式 B が出現しているものである。この「ノ」は、Rizzi(2004)で示される分離 CP における Fin(iteness)にある補文標識と捉えることができる⁴⁵⁾。「ノ」が Fin にあるとすると、小節から「ナ」までが TP 領域にあり、「ノ」より右の疑似モダリティ形式 B は CP 領域に位置することになる((81))。

⁴⁵⁾ Rizzi(2004)は、CP 領域に (i)のような分離構造があると指摘している。

i) Force Top* Int Top* Focus Mod* Top* Fin IP (Rizzi 2004: 242)

日本語の「ノ」は、CP の最も下にある Fin に位置するものと考えられる。この Fin は、「文の定形・非定形に関する素性が指定される」(栗原 2010: 101)位置であり、「ノ」は定形素性を指定する。

- (81) $\underbrace{\text{大谷さんはキャプテン } na}_{\text{TP 領域}} \quad \underbrace{-no-da/-darou/-kamosirenai}_{\text{CP 領域}}$

まず、補文標識「ノ」の前にある「大谷さんはキャプテン *na*」という TP 領域であるが、この小節末に現れている「ナ」は、(82)のように、過去時制コピュラ動詞「ダッタ」と交替可能であることから、非過去時制コピュラ動詞「 ϕ 」の活用形であると考えることができる。

- (82) a. 大谷さんはキャプテン [TP *na* [FinP *no* [ModP2 *da/darou/kamosirenai*]]]
 b. 大谷さんはキャプテン [TP *datta* [FinP *no* [ModP2 *da/darou/kamosirenai*]]]

次に、補文標識「ノ」の右側である CP 領域の構造を考えるために、この位置に「ダ」形の要素が出現する(83)のコピュラ文を取り上げてみる。

- (83) a. 大谷さんはキャプテン [TP *na/datta* [FinP *no - \phi*]]
 b. 大谷さんはキャプテン [TP *na/datta* [FinP *no - datta*]]
 c. 大谷さんはキャプテン [TP *na/datta* [FinP *no - darou*]]
 d. 大谷さんはキャプテン [TP *na/datta* [FinP *no - da*]]

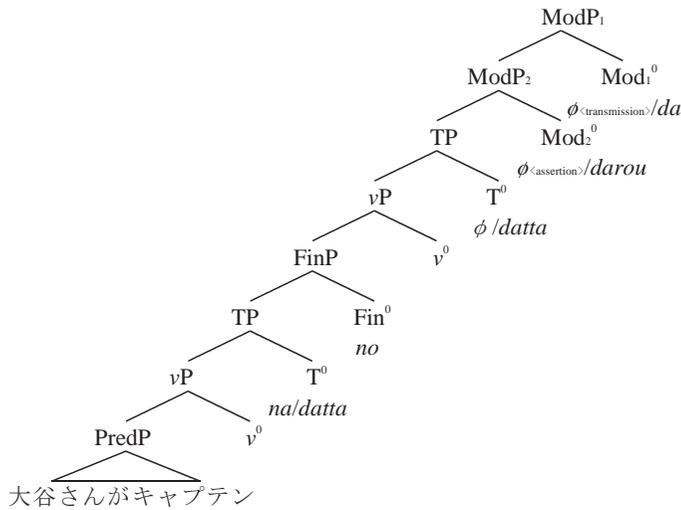
(83)のように、補文標識「ノ」の右側には「 ϕ 」・「ダッタ」・「ダロウ」・「ダ」の4種類の「ダ」系の要素が出現する。これらの「ダ」系の要素は、「 ϕ 」・「ダッタ」がコピュラ動詞、「ダロウ」が ModP₂に現れるモダリティ形式、「ダ」が ModP₁のモダリティ形式であり、それぞれ異なる階層に出現する。「 ϕ 」と「ダッタ」というコピュラ動詞がこの位置に出現することは、補文標識「ノ」の右側の部分には時制が存在するということになる。これは、疑似モダリティ形式「ダロウ」が現れる ModP₂の内部に TP が存在するというを示している⁴⁶⁾。このことから、補文標識「ノ」の右側の構造は、(84)のように記述することができる。

- (84) [FinP *no* [TP ϕ / *datta* [ModP2 ϕ <assertion> / *darou* [ModP1 ϕ <transmission> / *da*]]]]

(84)は、ModP₂の内部にある TP にコピュラ動詞「 ϕ 」・「ダッタ」、ModP₂に疑似モダリティ形式「 ϕ <assertion>」・「ダロウ」、そして ModP₁に真正モダリティ形式「 ϕ <transmission>」・「ダ」が出現することを示している。この(84)に命題部分を加えて(83)のコピュラ文の統語構造を簡略的に樹形図にしてみたものが(85)である。

⁴⁶⁾ このことは、「過去を許す」という疑似モダリティの特徴(77①)と合致する。

(85)



最後に、(79c)であるが、これは「大谷さんがキャプテン」という小節に「ノ」と疑似モダリティ形式Cが後続しているものである。この「ノ」は(79b)で考察した補文標識「ノ」とは異なる。それは、過去時制コピュラ動詞「ダッタ」が出現するとこの「ノ」が消失することから理解できる。

- (86) a. 大谷さんはキャプテン *no-youda/-hazuda/-hougayoi*
 b. 大谷さんはキャプテン *datta-youda/-hazuda/-hougayoi*

(86)で示したように、非過去時制コピュラ文で出現する「ノ」((86a))は、過去時制コピュラ文でコピュラ動詞「ダッタ」と交替している((86b))。このことから、(86a)における「ノ」は、非過去時制コピュラ動詞「 ϕ 」の活用形の一つとして捉えることができる。このため、(79c)の疑似モダリティ形式Cが出現するコピュラ文は、TPに「ノ」と「ダッタ」の交替がある(87)のような構造として解釈される可能性がある。

- (87) 大谷さんはキャプテン [TP *no/datta* [ModP2 *youda/hazuda/hougayoi*]]

(87)は、(88)の疑似モダリティ形式Aが出現する構造と類似する。

- (88) 大谷さんはキャプテン [TP $\phi/datta$ [ModP2 *mitaida/rasii/kamosirenai/nitigainai*]]

(87)と(88)は、非過去時制コピュラ文におけるコピュラ動詞「ノ」・「 ϕ 」の形態を除くと全

く同じ構造となるが、疑似モダリティ形式Cが出現する構造において、非過去時制コピュラ動詞がなぜ「ノ」と活用するのかということについて説明することができない。非過去時制コピュラ動詞「 ϕ 」の活用ということに着目すると、これまで、構造内に補文標識「ノ」の前で「ナ」と活用する疑似モダリティ形式Bが出現する構造があった。そこで本稿では、「非過去時制コピュラ動詞「 ϕ 」は、補文標識の前で活用する」という立場に立ち、(79c)の構造には、音形のない補文標識「 Φ 」があり、その前で非過去時制コピュラ動詞「 ϕ 」が「ノ」と活用すると考えてみたい。

- (89) a. [TP *na/(datta)* [FinP *no*]]
 b. [TP *no/(datta)* [FinP Φ]]

(89a)は補文標識「ノ」の前で非過去時制コピュラ動詞「 ϕ 」が「ナ」と活用し、(89b)は補文標識「 Φ 」の前で「ノ」と活用していることを示している⁴⁷⁾。このことから、(79c)の階層構造は(90)のように示すことができる⁴⁸⁾。

- (90) 大谷さんはキャプテン [TP *no/datta* [FinP Φ [ModP2 *youda/hazuda/hougayoi* [ModP1 ϕ <transmission>]]]]

以上のことから、本稿で扱った疑似モダリティ形式が出現する構造は、(91)のように示すことができる。

- (91) a. <疑似モダリティ形式A>
 大谷さんはキャプテン
 [TP ϕ /*datta* [ModP2 *mitaida/rasii/kamosirenai/nitigainai* [ModP1 ϕ <transmission>]]]
 b. <疑似モダリティ形式B>
 大谷さんはキャプテン
 [TP ϕ /*datta* [FinP *no* [ModP2 *mitaida/rasii/kamosirenai/nitigainai* [ModP1 ϕ <transmission>]]]]

⁴⁷⁾ この非過去時制コピュラ動詞「 ϕ 」の活用形である「ノ」は、「キャプテン *no/(datta)* 大谷さん」という倒置コピュラ文に出現する「ノ」との関連性があると思われるが、このことについては、また別の機会に触れてみたい。

⁴⁸⁾ ここで扱った3種類の疑似モダリティに類似したものに「ソウダ」がある。

i) 大谷さんはキャプテン *da souda*

しかしながら、「ソウダ」は、他の疑似モダリティ形式とは異なり、「*ソウダッタ」という過去形を持たない。このことは、「ソウダ」が真正モダリティ形式であることを示していると思われる。また、この他、「デアルベキダ」や「デアレバヨイ」という疑似モダリティ形式もあるが、これらは「デアル」というコピュラ動詞に「ベキダ」や「ヨイ」などのモダリティが後続しているものと考えられることができる。

c. <疑似モダリティ形式 C>

大谷さんはキャブテン

[_{TP} *no/datta* [_{FinP} Φ [_{ModP2} *youda/hazuda/hougayoi* [_{ModP1} ϕ _{<transmission>}]]]]

5. 結論

本稿では、通言語学的なコピュラ機能という観点から、日本語における「コピュラ動詞の体系」、「モダリティ領域の構成」、「コピュラ文の階層構造」に関しての考察を行った。

まず、「ダ」系のコピュラ動詞は、Fin に補文標識が出現しない場合、主節・従属節とも非過去時制「 ϕ 」・過去時制「ダッタ」という形式となる。これとは異なり、Fin に補文標識「ノ」・「 Φ 」が出現する場合は、非過去時制コピュラ動詞は活用した「ナ」・「ノ」という形式で現れる。一方、「デス」系においては、vP に出現するコピュラ動詞は「 ϕ 」である。この非過去時制コピュラ動詞「 ϕ 」が TP に移動し、TP にある時制辞 *-u/-ita* と結合することにより、非過去時制・過去時制コピュラ文ができる。以上の「ダ」系と「デス」系のコピュラ動詞の体系を一覧にしたものが<表7>となる。

<表7 : 「ダ」系と「デス」系のコピュラ動詞の体系>

		非過去時制	過去時制
「ダ」系	Fin なし	ϕ	ダッタ
	Fin あり	ナ・ノ	
「デス」系	Fin なし	ϕ	
	Fin あり	- ⁴⁹⁾	

次にモダリティ形式であるが、「ダ」系については、主節においては、ModP₂ に音形的にゼロである断定のモダリティ形式「 ϕ _{<assertion>}」、または、非断定のモダリティ形式「ダロウ」が任意に現れ、ModP₁ には音形のないモダリティ形式「 ϕ _{<transmission>}」もしくは断言のモダリティ形式「ダ」が出現する。一方、「デス」系は、丁寧さのモダリティ形式「 ϕ _{<politeness>}」が ModP₁ に出現する ((92))。

(92) 主節

a. 「ダ」系 : [_{ModP2} ϕ _{<assertion>}/darou [_{ModP1} ϕ _{<transmission>}/da]]b. 「デス」系 : [_{ModP2} [_{ModP1} ϕ _{<politeness>}]]

⁴⁹⁾ FinP の前にモーダル句はないので、「デス」はこの位置に現れることはない。

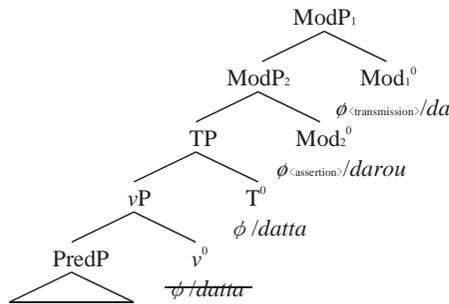
ModP₁を欠いた統語構造である従属節においては、(93)のように、断定のモダリティ形式「 $\phi_{\langle \text{assertion} \rangle}$ 」・「ダ」または、非断定のモダリティ形式「ダロウ」がModP₂に位置する。「デス」系の丁寧さのモダリティ形式「 $\phi_{\langle \text{politeness} \rangle}$ 」は、従属節にModP₁がないため現れることはない。

(93) 従属節：[CP [ModP₂ $\phi_{\langle \text{assertion} \rangle}$ /da/darou] C⁰]

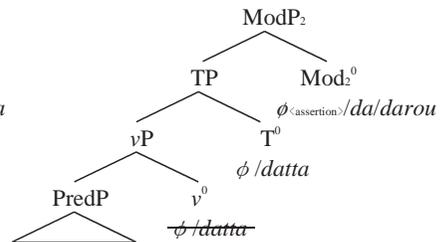
このようなコピュラ動詞の体系とモダリティ領域の構成から、コピュラ文の階層構造は(94)・(95)のように示せる。

(94) コピュラ文の階層構造（「ダ」系）

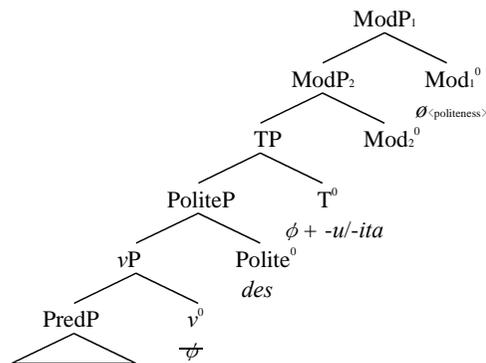
a. 主節



b. 従属節

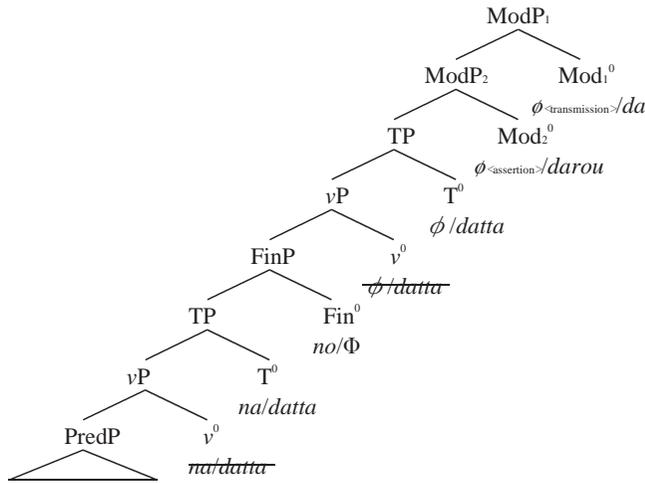


(95) コピュラ文の階層構造（「デス」系）



また、疑似モダリティ形式 B・C が補文標識に後続する階層構造は(96)のように示すことができる。

(96) コピュラ文の階層構造 (疑似モダリティ形式 B・C)



本稿では、日本語のコピュラ動詞の体系とモダリティ領域の構成の考察を通して、日本語コピュラ文の階層構造を設定した。通言語学的なコピュラ構造と日本語コピュラ構造との大きな違いは、TPの上にモーダル句が存在するという点である。日本語のコピュラ文は、このモーダル句にコピュラ動詞とモダリティ形式が複雑に現れることになる。

ここで、改めてコピュラ動詞とモダリティ形式に関する本稿での指摘をまとめると以下のようなようになる。

- ① モダリティ形式「ダ」は、主節においては ModP₁に位置し<断言>、従属節においては ModP₂に位置し<断定>のモダリティを示す。
- ② コピュラ文では、ModP₁にモダリティ形式「 $\phi_{\langle\text{transmission}\rangle}$ 」・「 $\phi_{\langle\text{politeness}\rangle}$ 」・「ダ」のいずれかが義務的に生じる。
- ③ 「ダ」系・「デス」系とも、コピュラ文における非過去時制コピュラ動詞は「 ϕ 」である（「デス」系は過去時制文においてもコピュラ動詞は「 ϕ 」）。
- ④ Finの前に位置するコピュラ動詞「 ϕ 」には、「ナ」(Fin: no)・「ノ」(Fin: Φ)という活用形がある。
- ⑤ 日本語のFinは定形の素性を有することからTPを持つ。
- ⑥ 従属節は、統語構造としてModP₁が欠けている。

今後は、本稿で設定した基底構造から倒置コピュラ文がどのように派生するのか、また、ModP₁は命題内にあるのかモダリティ領域にあるのか、といった問題を課題としていきたい。

<略号>

3: 三人称; Sg: 単数; Past: 過去; Nom: 主格, Acc: 対格, Instr: 具格; Fr.: フランス語, It.: イタリア語, Sp.: スペイン語, Rus.: ロシア語, Arab.: アラビア語。

<参考文献>

- Alharbi, Bader Yousef (2017) *The Syntax of Copular in Arabic*, Dissertation, University of Wisconsin Milwaukee.
- (2020) “The Pronominal Element in Arabic Copular Clauses,” *International Journal of English Linguistics* 10(4), 21–33.
- Cinque, Guglielmo (1999) *Adverbs and Functional Heads*, Oxford University Press.
- Geist, Ljudmila (2008) “Predication and Equation in Copular Sentences: Russian vs. English,” in Comorovski, Ileana & Klaus von Heusinger (eds.) *Existence: Semantics and Syntax*, Springer, 79–115.
- Koizumi, Masatoshi (1991) *Syntax of Adjuncts and the Phrase Structure of Japanese*, MA thesis, The Ohio State University.
- (1993) “Modal Phrase and Adjuncts,” Patricia M. Clancy (ed.) *Japanese/Korean Linguistics Volume 2*, Stanford Linguistics Association, 409–428.
- Narahara, Tomiko (2002) *The Japanese Copula: Forms and Functions*, Palgrave Macmillan.
- Pustet, Regina (2003) *Copulas: Universals in the Categorization of the Lexicon*, Oxford University Press.
- Rizzi, Luigi (2004) “Locality and Left Periphery,” Adriana Belletti (ed.) *Structures and Beyond: The Cartography of Syntactic Structures, Volume 3*, 223–251.
- Whitman, John (1989) “Topic, Modality, and IP Structure”. Susumu Kuno et al. (eds.) *Proceedings of the Third Harvard Workshop on Korean Linguistics*, 341–356.
- 井上和子 (1976) 『変形文法と日本語 上：統語構造を中心に』大修館書店。
- (2006) 「日本語の条件節と主文のモダリティ」, *Scientific Approaches to Language*, No.5, 1–28.
- (2007a) 「日本語の主文のモーダリティと条件節」, *Scientific Approaches to Language*, No.6, 39–74.
- (2007b) 「日本語のモーダルの特徴再考」, 長谷川信子編『日本語の主文現象：統語構造とモダリティ』, ひつじ書房, 227–260.
- 上田由紀子 (2007) 「日本語のモダリティの統語構造と人称制限」, 長谷川信子編『日本語の主文現象：統語構造とモダリティ』, ひつじ書房, 261–294.
- 上野貴史 (2017) 「日本語における「ハ」句と「ガ」格の統語機能について：イタリア語の CP Layer との対照」, 『広島大学大学院文学研究科論集』第77巻, 31–50.
- (2019) 「上代日本語における名詞述語文の小節構造分析：現代日本語の名詞述語文との比較から」, 『広島大学大学院文学研究科論集』第79巻, 63–95.
- (2020) 「名詞述語文の小節構造分析：英語・イタリア語・フランス語の場合」, *Nidaba*, No.49, 11–20.
- (2023) 「コピュラ動詞の統語的役割とコピュラ文の統語派生：コピュラ機能の通言語学的研究に向けて」, *Nidaba*, No.52, 39–78.
- 上山あゆみ (1990) 「「か」のない yes-no 疑問文の構造と I-to-C 移動の普遍性について」 *The Kansai Linguistic Society* 10, 23–32.
- 遠藤善雄 (2010a) 「終助詞のカートグラフィー」, 長谷川信子編『統語論の新展開と日本語研究：命題を越えて』開拓社, 67–94.
- (2010b) 「ムードとモーダルのカートグラフィー」, *Scientific Approaches to Language*, No.9, 1–23.
- (2014) 『日本語カートグラフィー序説』ひつじ書房。

- 栞原和生 (2010) 「日本語疑問文における補文標識の選択と CP 領域の構造」, 長谷川信子編『統語論の新展開と日本語研究: 命題を越えて』開拓社, 95-127.
- 田窪行則 (1987) 「統語構造と文脈情報」『日本語学』6, 37-48.
- 田野村忠温 (1990) 「文における判断をめぐって」『アジアの諸言語と一般言語学』三省堂.
- 寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味 第 I 卷』くろしお出版.
- (1984) 『日本語のシンタクスと意味 第 II 卷』くろしお出版.
- 西尾実 他編 (2019) 『岩波 国語辞典 第八版』岩波書店.
- 西垣内泰介・石居康男 (2003) 『英語から日本語を見る』研究社.
- 仁田善雄 (1999) 『日本語のモダリティと人称』(増補版) ひつじ書房.
- (2000) 「認識のモダリティとその周辺」, 『日本語の文法3: モダリティ』岩波書店, 79-159.
- 野田尚志 (1989) 「文構成」, 宮地裕編『講座 日本語と日本語教育 第 1 卷 日本語学要説』明治書院, 67-96.
- (1995) 「文の階層構造からみた主題ととりたて」, 益岡隆志他編『日本語の主題と取り立て』くろしお出版, 1-35.
- 長谷川信子 (2010) 「文の機能と統語構造: 日本語統語研究からの貢献」, 長谷川信子編『統語論の新展開と日本語研究: 命題を越えて』開拓社, 1-30.
- 益岡隆志 (1991) 「モダリティの文法」くろしお出版.
- (2007) 『日本語モダリティ探求』くろしお出版.
- 南不二男 (1964) 「述語文の構造」『国語研究』18号, 1-19.
- (1967) 「文の意味についての二三のおぼえがき」『国語研究』24号, 28-46.
- (1974) 『現代日本語の構造』大修館書店.
- (1993) 『現代日本語文法の輪郭』大修館書店.
- 宮崎和人・安達太郎・野田春美・高梨信乃 (2002) 『モダリティ 新日本語文法選書4』くろしお出版
- 森川正博 (2009) 『疑問文と「ダ」』ひつじ書房.
- 森山卓郎 (2000) 「基本叙法と選択関係としてのモダリティ」, 『日本語の文法3: モダリティ』岩波書店, 1-78.
- 山口秋穂・秋本守英編 (2001) 『日本語文法大辞典』, 明治書院.